

中郷西遺跡・西側北遺跡

西側北1号墳

-牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-

2007年3月

豊橋市教育委員会

なか ごう にし い せき にし がわ きた い せき
中郷西遺跡・西側北遺跡
にし がわ きた いち ごう ふん
西側北1号墳

—牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2007年3月

豊橋市教育委員会

カラー写真図版 1



西側北遺跡・西側北1号墳調査区全景（垂直）

カラー写真図版 2



1. 西側北遺跡・西側北1号墳調査区位置（垂直）



2. 西側北遺跡SB-1全景（北から）



1. 西側北遺跡SB-2 全景（南から）



2. 西側北遺跡SB-3 全景（南から）

カラー写真図版 4



1. 西側北遺跡SK-1 出土土器棺（南西から）



2. 西側北遺跡SK-1 出土土器棺断面（南西から）

カラー写真図版 5



1. 西側北1号墳試掘トレンチ検出状況（南西から）



2. 西側北1号墳墳丘断ち割り（南から）

カラー写真図版 6



1. 西側北 1号墳墓壙・掘立柱建物検出状況（南西から）

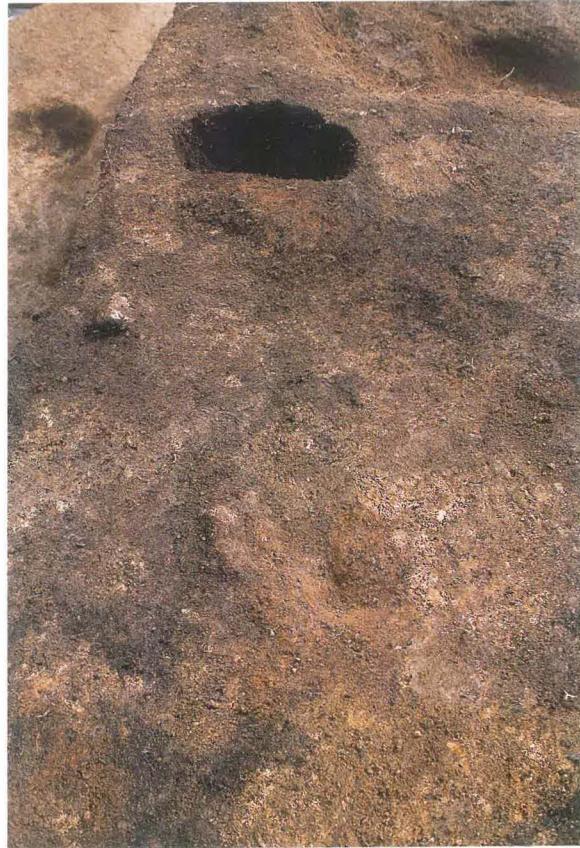


2. 西側北 1号墳突出部（北東から）

カラー写真図版 7



1. 西側北 1 号墳墓壙全景 (南西から)



2. 西側北 1 号墳検出焚火痕 (北から)

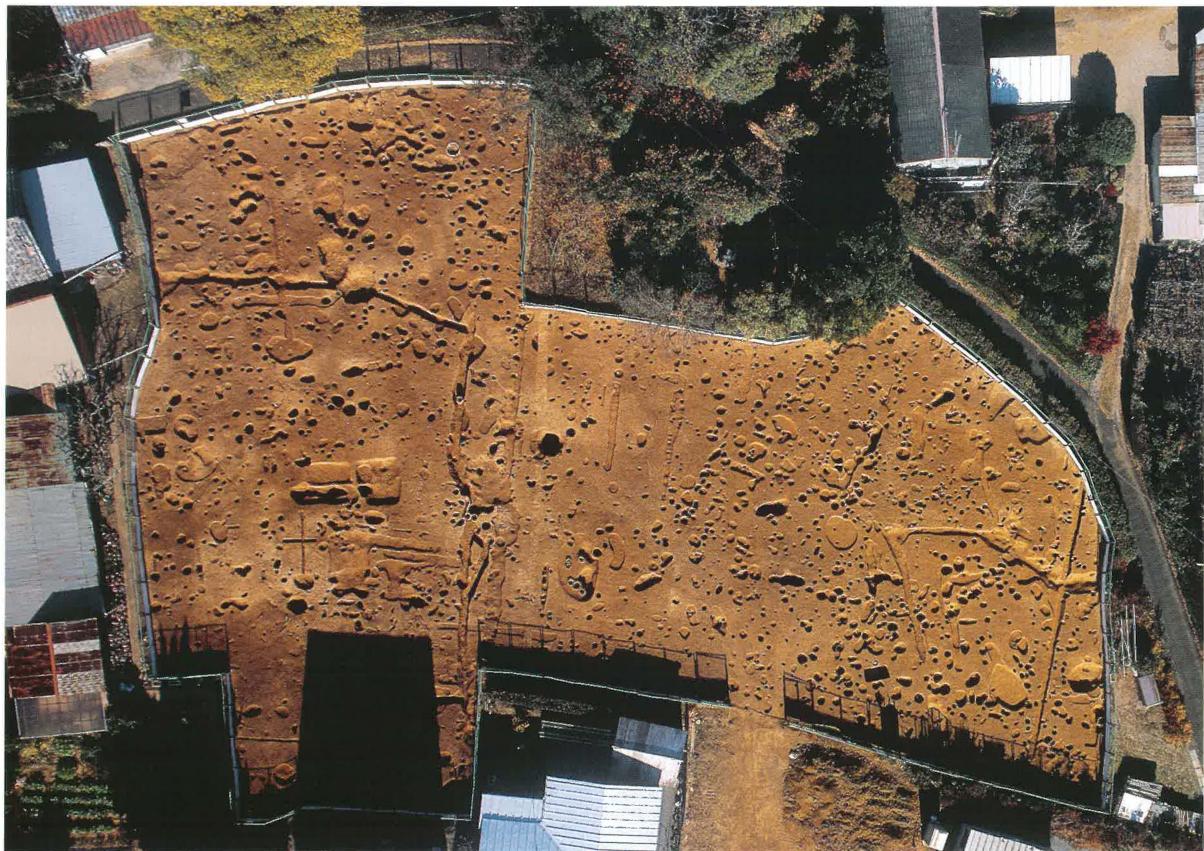


3. 西側北 1 号墳黒褐色砂質土層土器出土状況 (南から)



4. 西側北遺跡SK-2 遺物出土状況 (北東から)

カラー写真図版 8



1. 中郷西遺跡A地区全景（垂直）



2. 中郷西遺跡B地区全景（垂直）

例　言

1. 本書は、豊橋市牛川町字中郷 103 番地 12 他において牛川西部地区画整理事業に伴い事前に実施した中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北 1 号墳の発掘調査報告書である。調査面積・調査期間は以下のとおりである。

遺跡名	調　査　期　間	調査面積
中郷西遺跡 A 地区	平成 17 年 9 月 27 日～平成 17 年 12 月 10 日	2,000 m ²
中郷西遺跡 B 地区	平成 18 年 2 月 6 日～平成 18 年 2 月 20 日	650 m ²
西側北遺跡・西側北 1 号墳	平成 17 年 8 月 8 日～平成 17 年 9 月 28 日	250 m ²

2. 発掘調査については、豊橋牛川西部地区画整理組合から委託を受けた豊橋市教育委員会が行い、岩瀬彰利（豊橋市美術博物館学芸員）が担当した。

3. 発掘調査に際して、多くの土地所有者をはじめ、地元の方々のご理解・ご協力を頂いた。本書の執筆に際して、池谷信之（沼津市文化財センター）、長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）の両氏から玉稿を頂いている。また、伊藤正人（名古屋市教育委員会）、大塚達朗・長田友也（南山大学）、纒纒 茂（名古屋市見晴台考古資料館）、佐藤由紀男・鈴木敏則・鈴木一有（浜松市教育委員会）、設楽博巳（駒澤大学）、高橋浩二（富山大学）、田村陽一（三重県埋蔵文化財センター）、永井宏幸・川添和暁（愛知県埋蔵文化財センター）、西本豊弘・藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）、山本直人・梶原義実（名古屋大学）、和田晴吾（立命館大学）の各氏にご教示を頂いている。記して感謝の意を表す次第である。

4. 報告書の作成については、井上佳子・竹嶋浩子・平賀静子・補永享代・大谷孝世・安田明己・原田祥子の援助を受けた。写真撮影については、発掘調査・出土遺物は岩瀬が行ったが、中郷西遺跡・西側北 1 号墳についての航空写真撮影は株式会社 G I S 中部が行った。

5. 本書の執筆は以下のとおりである。編集は岩瀬が行った。

第 5 章 4. B	岩原 剛（豊橋市美術博物館学芸員）
第 6 章 1	長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）
第 6 章 2	池谷信之（沼津市文化財センター）
第 6 章 3	藤根 久・中村賢太郎（パレオ・ラボ）
第 6 章 4	藤根 久・Bhandari Sudarshan（パレオ・ラボ）
第 6 章 5	パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
上記以外	岩瀬彰利

6. 調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅷ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境	3

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過	5
2. 調査の方法	5

第3章 中郷西遺跡

1. 遺構	11
2. 遺物	29
3. まとめ	39

第4章 西側北遺跡

1. 遺構	43
2. 遺物	51
3. まとめ	62

第5章 西側北1号墳

1. 墳丘	67
2. 墳丘内遺構	73
3. 主体部	78
4. 遺物	80
5. まとめ	87

第6章 分析

1. 豊橋市西側北遺跡から出土した骨について	90
2. 西側北遺跡出土黒曜石製石器の原産地推定	91
3. 土器棺墓内赤褐色土のリン・カルシウム分析	94
4. 炭化物の同定	98
5. 古墳主体部炭化材の放射性炭素年代測定	99

挿 図 目 次

第 1 図	中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北 1 号墳位置図 (1 / 20,000)	1
第 2 図	中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北 1 号墳周辺地形図 (1 / 15,000)	2
第 3 図	中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北 1 号墳周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)	4
第 4 図	中郷西遺跡調査区位置図 (1 / 2,500)	7
第 5 図	西側北遺跡・西側北 1 号墳調査区位置図 (1 / 2,500)	7
第 6 図	調査区 (A 地区) 全体図 (1 / 500)	19
第 7 図	A 地区遺構位置図-1 (1 / 250)	20
第 8 図	A 地区遺構位置図-2 (1 / 250)	21
第 9 図	調査区 (B 地区) 全体図 (1 / 250)	22
第 10 図	A 地区遺構実測図-1 (1 / 80)	23
第 11 図	A 地区遺構実測図-2 (1 / 80)	24
第 12 図	A 地区遺構実測図-3 (1 / 80)	25
第 13 図	A 地区遺構実測図-4 (1 / 80)	26
第 14 図	A 地区遺構実測図-5 (1 / 80)	27
第 15 図	B 地区遺構実測図 (1 / 80)	28
第 16 図	A 地区出土遺物実測図-1 (1 / 3)	34
第 17 図	A 地区出土遺物実測図-2 (1 / 3)	35
第 18 図	A 地区出土遺物実測図-3・B 地区出土遺物実測図 (1 / 3)	36
第 19 図	調査区全体図 (1 / 100)	47
第 20 図	遺構実測図 (1 / 80)	48
第 21 図	S B - 1・2 遺物出土状況図 (1 / 20・1 / 40)	49
第 22 図	S K - 1・2・11 遺物等出土状況図 (1 / 10・1 / 20)	50
第 23 図	出土遺物実測図-1 (1 / 3)	53
第 24 図	出土遺物実測図-2 (1 / 4)	54
第 25 図	出土遺物実測図-3 (1 / 3)	57
第 26 図	出土遺物実測図-4 (2 / 3・1 / 2)	59
第 27 図	西側北 1 号墳墳丘測量図 (1 / 100)	68
第 28 図	西側北 1 号墳墳丘断面図 (1 / 50)	69
第 29 図	西側北 1 号墳完掘後平面図・断面図 (1 / 100)	70
第 30 図	墳丘南辺における S D - 1 と東辺周溝延長ライン間の最深部 (1 / 100)	72
第 31 図	黒褐色砂質土層上面検出遺構 (1 / 50・1 / 100)	74
第 32 図	墳丘内黒褐色砂質土層遺物出土状況図 (1 / 40)	75
第 33 図	黄褐色砂礫土層上面検出遺構 (1 / 50)	76
第 34 図	墓擴実測図 (1 / 50)	78
第 35 図	主体部副葬品出土状況図 (1 / 20)	79
第 36 図	出土遺物実測図-1 (1 / 3)	84
第 37 図	出土遺物実測図-2 (1 / 3)	85
第 38 図	出土鉄器実測図 (1 / 2)	87
第 39 図	西側北遺跡黒曜石産地推定判別	93
第 40 図	土器棺墓内赤褐色土プレス試料の元素マッピング図	96
第 41 図	土器棺墓内赤褐色土点分析のリン (P ₂ O ₅) - カルシウム (CaO) 分布図	97
第 42 図	曆年較正図	101

表 目 次

第 1 表 出土遺物観察表	37
第 2 表 繩文土器・弥生土器観察表	60
第 3 表 古墳時代以降遺物観察表	61
第 4 表 石器観察表	61
第 5 表 西側北 1 号墳出土遺物観察表	86
第 6 表 西側北遺跡黒曜石産地推定集計	92
第 7 表 西側北遺跡黒曜石測定強度	92
第 8 表 西側北遺跡黒曜石推定結果	92
第 9 表 リンおよび水銀の高い部分の点分析結果	95
第 10 表 測定試料及び処理	99
第 11 表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	100

カラー写真図版目次

1 西側北遺跡・西側北 1 号墳調査区全景（垂直）	2 西側北遺跡 SB-1 全景（北から）
2-1 西側北遺跡・西側北 1 号墳調査区位置（垂直）	2 西側北遺跡 SB-3 全景（南から）
3-1 西側北遺跡 SB-2 全景（南から）	2 西側北遺跡 SK-1 出土土器棺断面（南西から）
4-1 西側北遺跡 SK-1 出土土器棺（南西から）	2 西側北 1 号墳墳丘断ち割り（南から）
5-1 西側北 1 号墳試掘トレンチ検出状況（南西から）	2 西側北 1 号墳突出部（北東から）
6-1 西側北 1 号墳墓擴・掘立柱建物検出状況（南西から）	2 西側北 1 号墳検出焚火痕（北から）
7-1 西側北 1 号墳墓擴全景（南西から）	4 西側北遺跡 SK-2 遺物出土状況（北東から）
3 西側北 1 号墳黒褐色砂質土層土器出土状況（南から）	2 中郷西遺跡 B 地区全景（垂直）
8-1 中郷西遺跡 A 地区全景（垂直）	

写真図版目次

1-1 A 地区 SK-8（西から）	2 A 地区 SK-8（南から）
2-1 A 地区焼土（北西から）	2 A 地区 SE-1（東から）
3-1 A 地区 SB-6（南東から）	2 A 地区 SB-9・P6 と SB-10・P1 の柱穴重なり合い（南東から）
4-1 A 地区 SB-1（垂直）	2 A 地区 SB-4（垂直）
3 A 地区 SB-5（垂直）	4 A 地区 SB-6（垂直）
5 A 地区 SB-7（垂直）	6 A 地区 SB-8～10（垂直）
5-1 A 地区 SD-1（北から）	2 A 地区 SD-1（西から）
3 A 地区 SD-11（南から）	4 A 地区 SD-5（南から）
6-1 A 地区 SD-12（西から）	2 A 地区 SD-1・SK-3（北から）
3 A 地区 SB-9・P8（南から）	4 A 地区 SK-9（東から）
5 B 地区 SB-11・P11（南から）	6 B 地区 SB-11・P3（南から）
7-1 SB-1（南から）	2 SB-1 遺物出土状況（北から）
8-1 SB-2（北東から）	2 SB-2・敷石炉（南から）

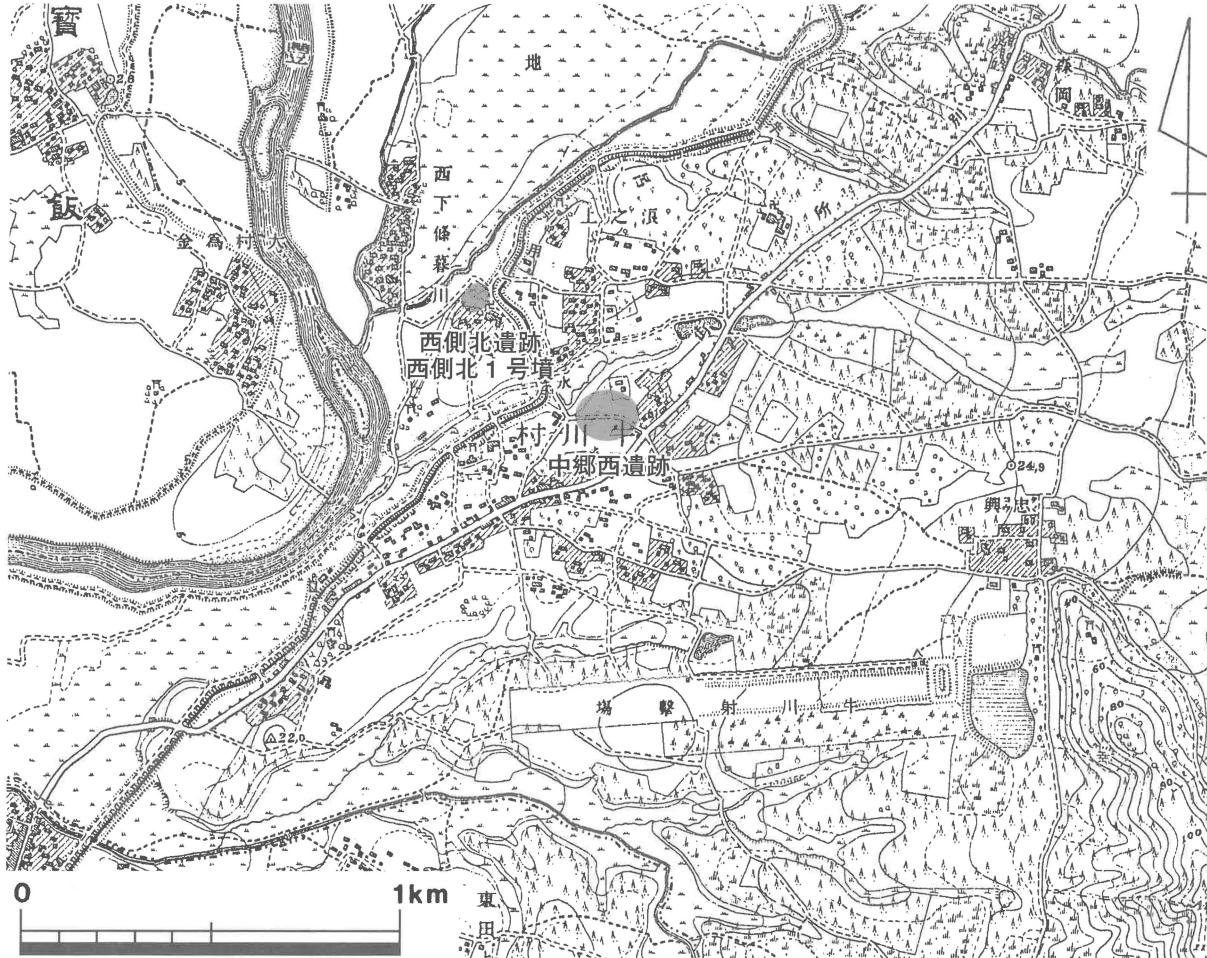
- 9-1 SB-3 (北から)
- 10-1 SK-1 土器棺出土状況 (南東から)
- 11-1 SK-3 (南から)
- 12-1 SK-5 (南から)
- 13-1 SK-2・刀子出土状況 (北東から)
- 14-1 古墳付近からの眺望 (南から)
- 15-1 平成2年度範囲確認調査時の墳丘 (東から)
- 16-1 平成2年度G-124北端 (南から)
- 3 平成2年度G-124北側とG-126の交点 (南から)
- 5 平成2年度G-124中央部 (北から)
- 17-1 平成2年度G-125西側 (東から)
- 3 平成2年度G-125東側 (南から)
- 5 平成2年度G-126東側 (西から)
- 18-1 平成2年度G-126東側 (東から)
- 3 平成2年度G-125調査風景
- 19-1 墳丘表土除去後全景 (南から)
- 20-1 墳丘表土除去後全景 (北から)
- 21-1 墳丘南側断面 (東から)
- 22-1 墓壙の掘り込み・北端 (西から)
- 23-1 墓壙の掘り込み・西端 (北から)
- 24-1 墓壙内副葬品出土状況 (東から)
- 3 鉄鎌出土状況 (南から)
- 5 剣出土状況 (南から)
- 25-1 SK-13 (南から)
- 3 黒褐色砂質土層遺物出土状況 (東から)
- 26-1 墳丘南辺 (東から)
- 27-1 北辺周溝・SK-12 (北西から)
- 28-1 突出部 (北東から)
- 29-1 突出部 (南西から)
- 30-1 北側周溝付近調査区壁面 (北西から)
- 31 出土遺物
- 32 繩文土器
- 33 弥生土器
- 34 古墳時代以降の遺物
- 35 石器
- 36 出土遺物-1
- 37 出土遺物-2
- 38 出土鉄器
- 39 炭化材の走査電子顕微鏡写真と炭化種子の実体顕微鏡写真
- 2 SK-1 完掘状況 (南から)
- 2 SK-1 土器棺出土状況 (北東から)
- 2 SK-4 (東から)
- 2 SK-11・礫出土状況 (東から)
- 2 調査区完掘後全景 (北東から)
- 2 平成2年度範囲確認調査時の墳丘 (南東から)
- 2 平成2年度G-124とG-126の交点部分 (南から)
- 2 平成2年度G-124北側 (北から)
- 4 平成2年度G-124中央部 (北から)
- 6 平成2年度G-124南端 (南から)
- 2 平成2年度G-125東側 (東から)
- 4 平成2年度G-125東端 (東から)
- 6 平成2年度G-126西側 (東から)
- 2 平成2年度G-127 (西から)
- 4 平成2年度G-125調査風景
- 2 墳丘表土除去後全景 (南東から)
- 2 墳丘北側・重機による削平箇所 (東から)
- 2 墳丘西側断面 (南から)
- 2 墓壙の掘り込み・南端 (東から)
- 2 墓壙及び掘立柱建物 (南東から)
- 2 墓壙内副葬品出土状況 (北から)
- 4 鉄鎌・剣出土状況 (東から)
- 6 鍔鋤先出土状況 (東から)
- 2 黒褐色砂質土層遺物出土状況 (南から)
- 2 東辺周溝・SK-12 (北東から)
- 2 東辺周溝・SK-12 (南西から)
- 2 突出部 (南東から)
- 2 突出部 (南西から)
- 2 SK-12付近調査区壁面 (南西から)

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1・2図)

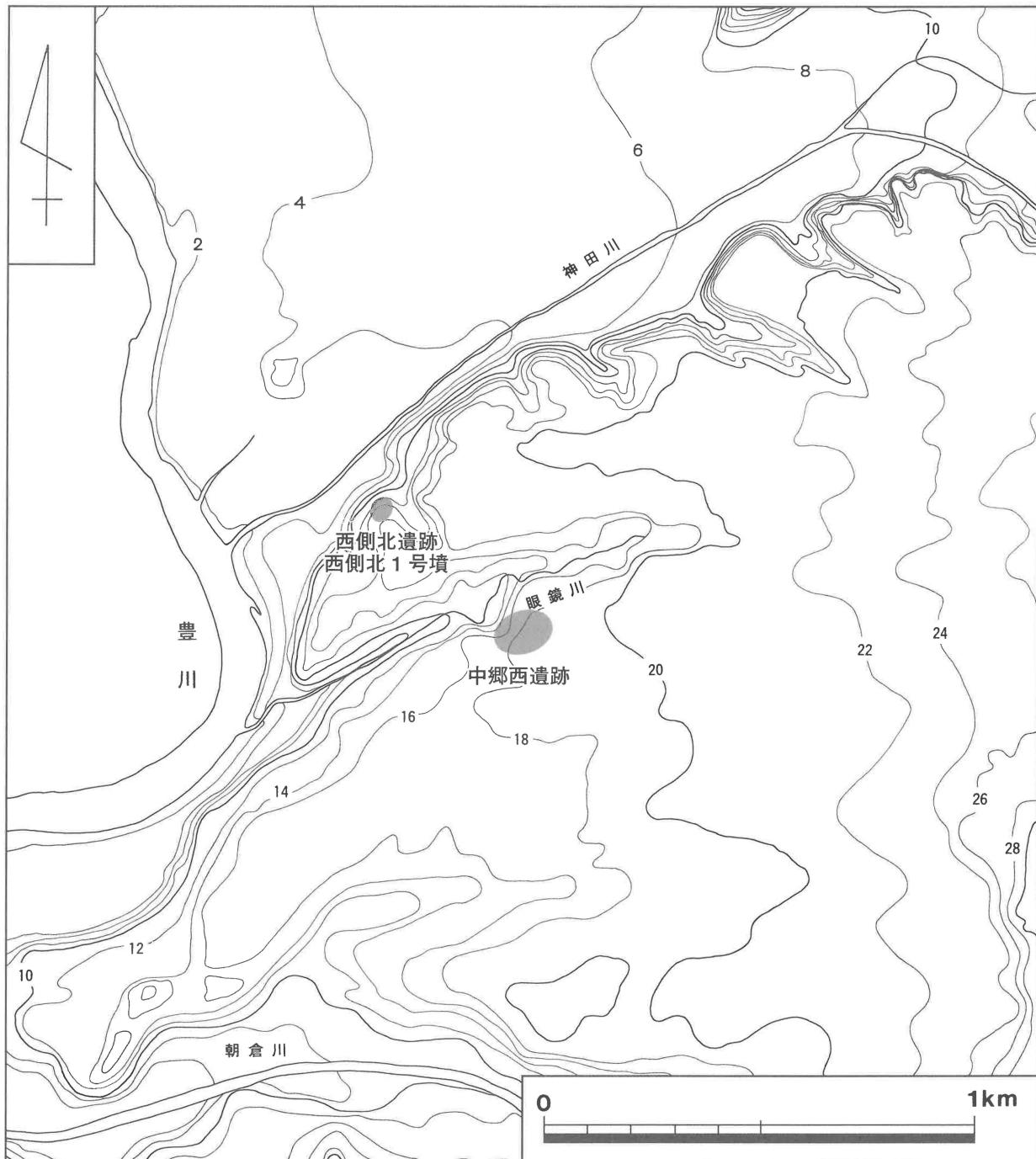
豊橋市は西側を三河湾、南側を太平洋、東側を弓張山系の山地、北側を豊川に囲まれた都市である。市が接する三河湾は東部湾奥部に相当し、そこには豊川が流入している。豊川は奥三河山間部を源とし、中央構造線に沿って南西に流下する1級河川である。中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北1号墳は、豊橋市中心部から北東に4km程のところにあり、豊川の支流である眼鏡川によって開析された標高15～19m前後の段丘上に位置する。これらの遺跡が所在する段丘は、朝倉川と神田川によって開析された牛川面と呼ばれる河岸段丘で、中位面に相当する。この牛川面は、西側に広がる豊橋平野の沖積低地と高低差が10～15m程もあり、段丘崖によって明確に区切られている。東側は弓張山系の山地と接しており、そこから南西に向かって緩やかに傾斜している。この牛川面の特徴は、豊川によって形成された河岸段丘上に、その支流の朝倉川や神田川による扇状地性の堆積物が覆っていることで、比較的大きな礫を含んだ粒の揃わない砂礫層が形成されている。

中郷西遺跡は、牛川面が更に眼鏡川によって開析された段丘北端部に立地し、川との比高差は約5mである。眼鏡川は段丘端から内部に1kmほどのところに湧水による池があり、そこで谷が消滅し



第1図 中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北1号墳位置図

(1/20,000 明治23年 大日本帝国陸地測量部より)



第2図 中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北1号墳周辺地形図（1／15,000）

てその上流では水流が認められない。これは東部にある弓張山系の山地から伏流水が流れているためで、中郷西遺跡は水利の得やすい良好な環境に集落が営まれていた。

西側北遺跡・西側北1号墳は牛川面の端部に位置し、すぐ下を神田川が流れている。川との比高差は約12mで、遺跡西側には沖積地が広がる。西側北遺跡・西側北1号は豊川本流近くの眺望の良い高台に集落が営まれ、古墳が築造されていた。

参考文献

水野季彦 1995 「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第23集 熊野遺跡』 1～4 頁

豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会：豊橋

2. 歴史的環境（第3図）

中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北1号墳のある豊川左岸の段丘縁部は遺跡の密集地である。ここでは、時代ごとに周辺遺跡について述べる。

縄文時代

早期では、竪穴住居や煙道付炉穴が多数検出された眼鏡下池北遺跡（28）がある。このほか、押型文土器が出土したおいほて遺跡（22）や浪ノ上遺跡などが知られている。前期では西側北遺跡から北白川下層Ⅱb式土器や竪穴住居が発見されている。中期では洗島遺跡（15）から中期中葉を中心とした竪穴住居が検出されている。晩期になると周辺の遺跡でも土器片が出土するが、規模の大きな遺跡は確認されていない。

弥生時代

前期では遠賀川式期の環濠が検出された白石遺跡がある。中期になると遺跡数は急増し、西側遺跡（18）では竪穴住居が検出している。他にも熊野遺跡、高井遺跡、浪ノ上遺跡、狭間（森岡）遺跡（20）などで、竪穴住居や方形周溝墓などが検出されている。後期になると西側遺跡、浪ノ上遺跡、高井遺跡では大規模な環濠が巡るようになる。

古墳時代

古墳時代は、竪穴住居が白石遺跡、高井遺跡、熊野遺跡、東田遺跡などで、竪穴住居などが確認されている。沖積低地にある東郷廻遺跡（4）や広間遺跡（5）、下河原遺跡（13）、為河原郷遺跡などからも須恵器や土師器が採集されており、低地にも集落が営まれていたようである。古墳は前期の西側北1号墳、中期の洗島1号墳が確認されている。また、朝倉川左岸には中期の東田古墳がある。全長40m程の前方後円墳である。稲荷山1・2号墳などは中期～後期にかけての方墳と考えられる。

古代以降

古代は、西側遺跡で竪穴住居や土壙などが確認され、西先原遺跡（23）では道路状遺構や柵列が検出されている。

中世では、西側遺跡で集落の跡や多数の地下式土壙墓が確認されている。熊野遺跡（18）では15世紀後半と推測される地下式坑（地下式土壙墓）が検出され、西側古墓群（17）では12世紀末～15世紀の藏骨器や五輪塔などが出土している。中世城館址も多く、高井城址や下条館址、下条堀内古屋敷址（3）、二連木城址、浪之上古屋敷址（19）などがある。

近世では、神ヶ谷遺跡（10）や熊野遺跡、西側遺跡などがある。また吉田藩のお庭焼きである牛川焼窯址（27）からは、陶器や窯道具が出土している。



- | | | | |
|-----------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 西側北遺跡・西側北1号墳 | 2. 牛川洞穴遺跡 | 3. 下条堀内古屋敷址 | 4. 東郷廻遺跡 |
| 5. 広間遺跡 | 6. 高井古墳群 | 7. 城ノ内遺跡 | 8. 萱野遺跡 |
| 10. 神ヶ谷遺跡 | 11. 桑原遺跡 | 12. 上ノ畠遺跡 | 13. 下河原遺跡 |
| 15. 洗島遺跡 | 16. 中郷西遺跡 | 17. 西側古墓群 | 18. 熊野遺跡 |
| 20. 狹間（森岡）遺跡 | 21. 西浦遺跡 | 22. おいはて遺跡 | 23. 西先原遺跡 |
| 24. 仁連木遺跡 | 25. 東田遺跡 | 26. 相生塚古墳 | 27. 牛川焼窯址 |
| 29. 乗小路A～D古墳群 | 30. キジ山古墳群 | | 28. 眼鏡下池北遺跡 |

第3図 中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北1号墳周辺遺跡分布図（1/25,000）

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過（第4・5図）

今回発掘調査を行った中郷遺跡・西側北遺跡・西側北1号墳のある豊橋市牛川町は、市中心部から4kmの位置にある交通の便のよい地域であり、宅地開発等が進んでいる地区である。この地区に対しては、市教育委員会が昭和61年度と平成元年度に分布調査を行って遺跡範囲を推定し、さらに平成2年度と平成9年度には範囲確認調査を実施して、遺跡の範囲を確定している。牛川町の周辺部では近年、土地区画整理や宅地開発が進んでいたが、牛川町の中心部は江戸時代から続く道が細い旧来のままの集落であった。このため、平成7年度から豊橋牛川西部土地区画整理組合によって約43haに及ぶ土地区画整理事業が計画・実施され、道路などが整備され始めている。

中郷遺跡・西側北遺跡・西側北1号墳の発掘調査は、この土地区画整理事業に伴うものである。土地区画整理地内には西側遺跡、中郷遺跡、洗島遺跡、東側遺跡などの遺跡が8遺跡存在している。遺跡の発掘調査は平成14年度の西側遺跡第1次調査から始まり、しばらくは西側遺跡の調査が続いた。平成17年度には洗島遺跡、西側北遺跡、中郷西遺跡、眼鏡下池北遺跡の調査を行っている。今回報告する中郷西遺跡の調査は宅地及び道路造成部分の調査であり、第1次調査に相当する。調査は2箇所で行っている（第4図）。最初の調査は宅地造成・道路部分のA地区で、調査期間は平成17年9月27日～12月10日、調査面積は2,000m²である。宅地造成部分のB地区は年度当初の調査計画にはなかった箇所である。造成工事が急遽決まったため、眼鏡下池北遺跡の調査を中断して緊急に調査を行っている。調査期間は平成18年2月6日～2月20日、調査面積は650m²である。

一方の西側北遺跡は、平成17年度の工事予定は雑木林伐採のみで造成工事の予定がなかったため、当初は発掘調査の計画から除外してあった。しかし、平成17年8月に雑木林伐採の際に築造した重機乗り入れの道が、古墳と思われるマウンドを若干削っていたことがわかった。このマウンドは試掘調査では古墳と断定できなかったが、古墳の可能性が高いと考えられていたものである。このため対策を区画整理組合と相談し、そのままにしておくと掘削部が崩壊するおそれがあることから、緊急に調査を行うこととした。調査期間は平成17年8月8日～9月28日で、調査面積は250m²である。調査の結果、調査区内のマウンドは古墳であることが判明した。このため、この古墳を西側北1号墳と命名して区別した。

2. 調査の方法

発掘調査は、基本的に切り土によって遺跡を破壊する部分を対象としている。今回の発掘調査は道路部分及び宅地造成、用水付け替え部分について行っている。調査面積は中郷西遺跡で2,650m²、西側北遺跡で250m²である。調査区の設定については、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、この国土座標に合わせて中郷西遺跡・西側北遺跡の北西隅を起点にして、10mグリッド

を設定した。この起点より西から東にA～Z、北から南に1～17というように名付け、その交点を地区名としている。

発掘調査の手順は表土を重機を用いて掘削し、後は人力で掘り下げる。ただ、西側北遺跡については表土層から全て手掘りで行っている。具体的な作業順序は以下のとおりである。

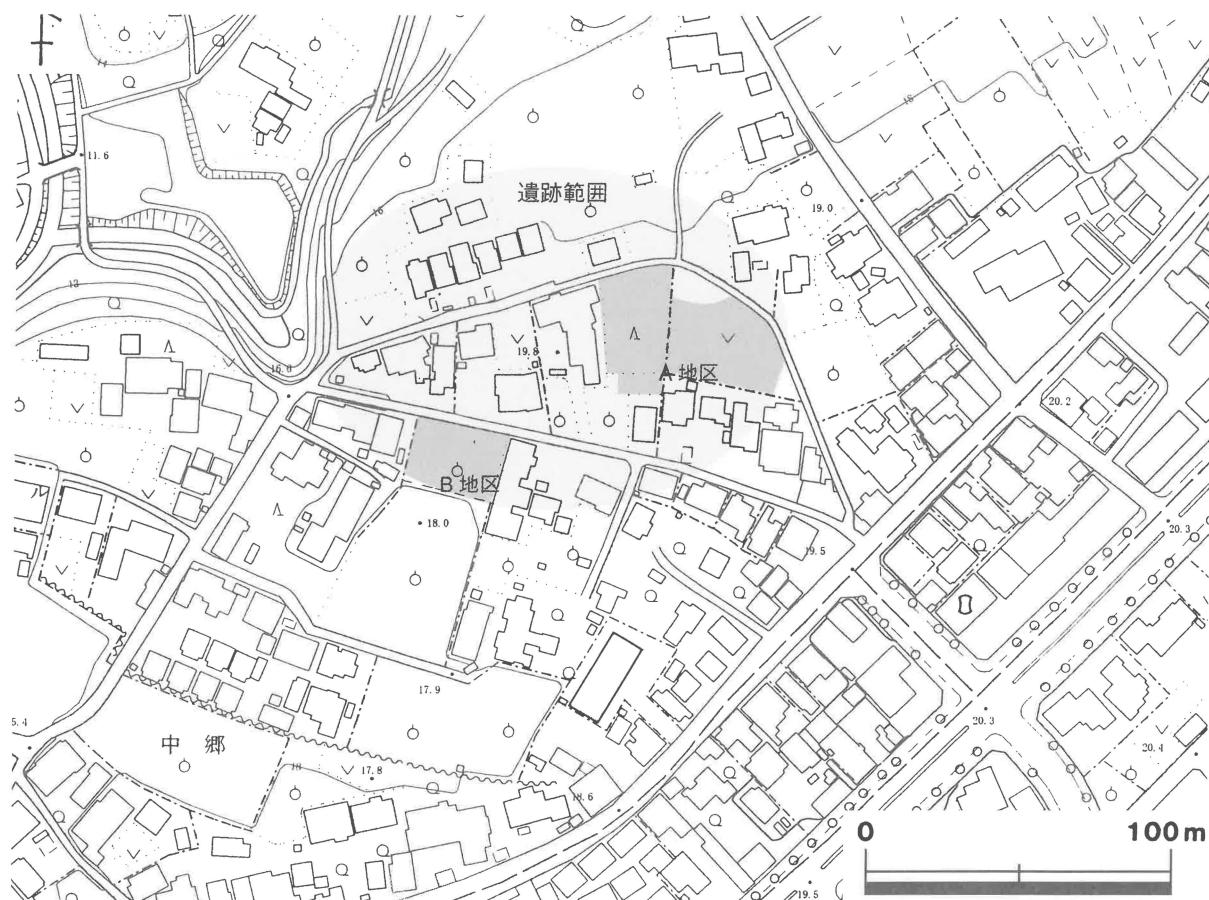
中郷西遺跡

1. 重機を使用して調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 人力で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
3. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成したり、出土状況写真を撮影する。
4. 調査区内の遺構を完掘し、個別遺構写真を撮影する。
5. ラジコンヘリを用いて調査区の全体写真を撮影し、航空測量による遺構全体図を作成する。

西側北遺跡・西側北1号墳

1. 手掘りで調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 試掘トレーニングを再発掘し、古墳断面図を作成する。
3. 墳丘の掘削をして主体部の検出・掘削を行い、遺物を取り上げて出土状況図などを作成する。
4. 墳丘内の黒褐色砂質土層を掘削し、遺構の検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
5. 地山面で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
6. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成したり、出土状況写真を撮影する。
7. 調査区内の遺構を完掘し、遺構全体図を完成させる。
8. ラジコンヘリを用いて調査区の全体写真を撮影する。

こうして、平成17年8月8日～平成18年2月20日の期間にわたり中郷西遺跡、西側北遺跡・西側北1号墳の発掘調査を行っている。なお、前年度までの牛川西部地区土地区画整理に伴う発掘調査は、豊橋市が独自に実施した緊急雇用対策事業の指定を受けていたため、新規に失業者を作業員として雇用していた。しかし、平成17年度からはこの事業が無くなつたため、失業者を作業員として雇用することは行つていない。



第4図 中郷西遺跡調査区位置図 (1/2,500)



第5図 西側北遺跡・西側北1号墳調査区位置図 (1/2,500)

中郷西遺跡

第3章 中郷西遺跡

中郷西遺跡は、A地区（2,000m²）とB地区（650m²）の2箇所で調査を行っている。ここでは両地区の遺構・遺物をまとめて説明する。

1. 遺構

遺構は、掘立柱建物（SB）11棟、柵（SA）5列、溝（SD）・土壙多数等が検出されている。ここでは各遺構を種類ごとに説明し、土壙に関しては遺物を出土したものを中心に記載する。なお、各遺構の規模等は検出面で測った数値であり、掘立柱建物、柵の規模計測値は柱穴の中心間の測定値である。

A. 掘立柱建物（第10～12・15図）

掘立柱建物は、側柱建物が11棟確認されている。この他に、柱穴と考えられる土壙も存在しており、11棟以上の建物があったものと思われる。

SB-1（第10図）

A地区L・M-6区で検出された2間以上×1間以上の側柱建物で、大半は調査区外である。主軸方位はN-68°-Wである。規模は桁行6.0m以上、梁間4.9m以上である。桁行の柱間隔は2.0mである。梁間の柱間隔は2.0m以上である。柱穴は平面形が円形のものやP3のように不整形なものがあり、規模は径48～121cm、深さは19～56cmと比較的大きい。

出土遺物は無くて建物の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

SB-2（第10図）

A地区M・N-6区で検出された3間×1間以上の側柱建物である。主軸方位はN-80°-Eである。規模は桁行5.8m、梁間4.1m以上である。桁行の柱間隔は1.7～2.4mである。梁間の柱間隔は2.0mである。柱穴は平面形が円形、楕円形やP6のような方形なものがあり、規模は径68～92cm、深さは12～24cmと比較的大きい。

出土遺物は無くて建物の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

SB-3（第10図）

A地区L・M-7区で検出された5間以上×2間の側柱建物である。主軸方位はN-69°-Wである。規模は桁行6.0m以上、梁間3.8mである。桁行の柱間隔は0.8～1.2mであるが、南側の柱穴は一部検出ができない。梁間の柱間隔は2.0mである。柱穴は、平面形が円形、楕円形など様々で、規

模は径24～84cm、深さは8～28cmと比較的小さい。

出土遺物は無くて建物の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S B-4 (第11図)

A地区N-7区で検出された1間以上×2間の側柱建物で、大半は調査区外である。主軸方位はN-81°-Wである。規模は桁行4.6m以上、梁間4.6mである。桁行の柱間隔は2.4～2.6mである。梁間の柱間隔は2.0～2.2mである。柱穴は平面形が円形か楕円形で、規模は径41～52cm、深さは36～64cmである。

出土遺物は無くて建物の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S B-5 (第11図)

A地区L・M-7・8区で検出された2間以上×3間の側柱建物で、大半は調査区外である。主軸方位はN-1°-Wである。規模は桁行4.8m以上、梁間5.4mである。桁行の柱間隔は1.8mであるが、東側の柱穴は溝や他の土壌等で確認できなかった。梁間の柱間隔は1.6～1.8mである。柱穴は平面形が円形か楕円形で、規模は径43～99cm、深さは8～12cmである。

出土遺物は無くて建物の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S B-6 (第11図)

A地区L-8・9区で検出された3間×1間以上の側柱建物で、大半は調査区外である。主軸方位はN-14°-Wである。規模は桁行7.4m、梁間2.2mである。桁行の柱間隔は1.8～3.4mであり、P4とP5の間隔が離れている。梁間の柱間隔は1.8mである。柱穴は平面形が円形か楕円形で、規模は径56～125cm、深さは24～40cmである。

出土遺物は無くて建物の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S B-7 (第11図)

A地区O・P-8区で検出された4間×2間の側柱建物である。建物の主軸方位はN-81°-Wである。規模は桁行7.9m、梁間3.2mである。桁行の柱間隔は1.8mであるが、P4～P5とP7～P8の間は2.4mと間隔が空いている。梁間の柱間隔は1.6mである。柱穴は平面形が円形または楕円形で、規模も径42～104cm、深さは8～48cmと不揃いである。

出土遺物は無くて建物の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S B-8 (第10図)

A地区P-9区で検出された2間×1間の側柱建物である。主軸方位はN-12°-Eである。規模は桁行4.0m、梁間2.4mである。桁行の柱間隔は1.9～2.2mである。柱穴は平面形が円形または楕円形で、規模は径68～103cm、深さは22～41cmと不揃いである。

出土遺物は無くて建物の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S B-9 (第12図)

A地区P・Q-10・11区で検出された4間×2間の側柱建物である。柱穴のP 6がS B-10・P 1と重複し、柱穴の重なり具合からS B-9の方が新しいことがわかっている。建物の主軸方位はN-73°-Eである。規模は桁行7.2m、梁間は西側が2.7m、東側が3.2mと長さが異なっている。桁行の柱間隔は1.8m、梁間の柱間隔は1.4~1.6mである。柱穴は平面形が円形または楕円形で、規模は径41~101cm、深さは40~48cmである。

遺物はP 1からは縄文土器が、P 12からは陶器・香炉が出土しており、建物の時期は17~18世紀のものと思われる。

S B-10 (第12図)

A地区P・Q-10・11区で検出された4間×2間の側柱建物である。前述したように柱穴のP 1がS B-9・P 6と重複しており、S B-10の方が古いことがわかっている。建物の主軸方位はN-71°-Eである。規模は桁行7.3m、梁間は4.6mである。桁行の柱間隔は1.8m、梁間の柱間隔は2.2mである。柱穴は平面形が円形または楕円形で、規模は径60~92cm、深さは28~72cmである。

出土遺物は無いが柱穴の重複から建物の時期は近世以前のものと思われ、S B-9と余り時期差がないものと思われる。

S B-11 (第15図)

B地区F・G-11区で検出された3間以上×1間以上の側柱建物で、大半は調査区外である。主軸方位はN-81°-Eである。規模は桁行8.8m以上、梁間2.9m以上である。桁行の柱間隔は2.6~2.8mである。梁間の柱間隔は1.8mである。柱穴は平面形が楕円形または不整形で、規模は径132~140cm、深さは14~60cmである。

出土遺物にはP 1からは土師器・皿が、P 2からは縄文土器が、P 3からは土師器・皿があり、このことから建物の時期は近世のものと思われる。

B. 柵 (第12・13・15図)

柱穴が並ぶものがあるが、建物とならないため柵とした。A地区で4列、B地区で1列が確認されている。

S A-1 (第12図)

A地区M・N-6区で検出された4間の柵で、主軸方位はN-79°-Eである。規模は3.0mで、柱間隔は1.6~2.0mである。柱穴は平面形が円形や楕円形のもので、規模は径40~60cm、深さは14~36cmである。

出土遺物はなく柵の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S A - 2 (第13図)

A地区O～Q－8区で検出された7間の柵で、主軸方位はN-86°-Wである。規模は19.2mで、柱間隔は2.6～3.2mである。柱穴は平面形が円形や楕円形のもので、規模は径25～60cm、深さは12～28cmである。

出土遺物はなくて柵の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S A - 3 (第13図)

A地区O～P－8区で検出された5間の柵で、主軸方位はN-86°-Wである。規模は13.3mで、柱間隔は2.6～3.2mである。柱穴は平面形が円形や楕円形、不整形で、規模は径32～121cm、深さは12～26cmである。

出土遺物はなくて柵の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S A - 4 (第13図)

A地区P－9区で検出された4間の柵で、主軸方位はN-10°-Wである。規模は8.0mで、柱間隔は1.8～2.0mである。柱穴は平面形が楕円形か不整形で、規模は径26～112cm、深さは8～56cmである。

出土遺物はなくて柵の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

S A - 5 (第15図)

B地区I-12・13区で検出された3間の柵で、主軸方位はN-7°-Wである。規模は6.6mで、柱間隔は1.8～2.8mである。柱穴は平面形が楕円形や豆形で、規模は径68～88cm、深さは8～48cmである。

出土遺物はなくて柵の時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

C. 溝 (第7・8図)

溝は、6条以上が確認されている。

S D - 1 (第7図)

A地区L～N-7～10区で検出された溝で、東-西方向に延びてN区で南北方向にほぼ直角に折れている。溝はN-9区あたりで一度二条に分かれるがすぐ合流し、南端で鍵の手に曲がりながら南へ続いている。規模は検出長38.2m、最大幅1.3m、溝の床面はほぼ平坦で、深さは最大で51cmと南側が深い。出土遺物は、縄文土器、陶器・碗・皿等、土師器・皿等、砥石、瓦があり、溝の時期は19世紀代と思われる。

S D - 2 (第7図)

A地区M-7区で検出された溝で、南-北方向に延びている。溝の南端はS K - 20と重複している。規模は検出長8.0m、最大幅0.9m、溝の床面は比較的平坦で、深さは最大で23cmである。出土遺物には陶器・碗があり、時期は19世紀中葉である。

S D - 3 (第7図)

A地区L～N-6・7区で検出された溝で、調査区端を南-北方向から東-西方向に折れ、半分は調査区外へ延びている。規模は検出長29.6m、最大幅0.7m以上、床は湾曲しており、深さは最大で41cmである。出土遺物は無く、時期は不明である。

S D - 4 (第7図)

A地区N-7～9区で検出された溝で、S D - 1と併行して南-北方向へ延びている。S K - 1によってS D - 1と繋がっている。規模は検出長21.2m、最大幅1.4mである。溝の床面は平坦で、深さは最大で14cmである。出土遺物には陶器・皿があり、時期は18世紀中葉頃である。

S D - 5 (第8図)

A地区P～R-8・9区で検出された溝で、東-西方向に延びて南-北方向に折れている。溝はQ-8区で二股に分かれている。規模は検出長21.7m、最大幅1.3mである。溝の床面は平坦で、深さは最大で29cmである。出土遺物には陶器・徳利があり、時期は19世紀頃のものと思われる。

S D - 6 (第8図)

A地区Q・R-8～10区で検出された溝で、南-北方向へ直線的に延びてS D - 5と交差している。規模は検出長18.8m、最大幅0.5mである。溝の床面は平坦で、深さは最大で33cmで北へ行くほど深い。出土遺物は陶器・擂鉢があり、時期は18世紀後葉である。

D. 井戸 (第14図)

井戸は1基が検出されているが、安全を優先したため完掘していない。

S E - 1 (第14図)

A地区N-8区で検出された井戸で、平面形はほぼ円形で規模は径1.6mであるが、西側に浅い掘り込みが確認できている。径1.4mの大きさでほぼ垂直に掘られているようであるが、安全面の観点から完掘はしていない。出土遺物は無く、時期は不明である。

E. 土壙（第14・15図）

土壙は、検出長3mを越える大きな土壙をはじめ、柱穴状の小さなものまで、様々な形態のものが調査区全体から多数検出されている。ここでは、遺物が出土している土壙を中心に述べる。

S K - 1（第14図）

A地区N-8区で検出された土壙で、SD-1・4と重複している。平面形は不整形で、規模は径3.0m、深さは32cmである。出土遺物には陶器・碗、土師器・鍋があり、時期は19世紀と思われる。

S K - 2（第14図）

A地区N-8区で検出されたほぼ円形の土壙であり、SK-1に壊されている。規模は径56cm、深さは29cmである。出土遺物には陶器・碗・灯明具があり、時期は18世紀中葉である。

S K - 3（第14図）

A地区N-10区で検出された土壙で、中央をSD-1が重複しているが先後関係はわからっていない。平面形はほぼ橢円形に近く、規模は長径3.7m、深さは34cmである。出土遺物に陶器・擂鉢があり、時期は近世である。

S K - 4（第14図）

A地区Q-8区で検出された土壙で、SD-5と重複している。平面形は円形に近かったものと思われ、規模は長径1.3m、深さは16cmである。出土遺物には陶器・猪口があり、時期は近世である。

S K - 5（第14図）

A地区Q-9区で検出された土壙で、平面形は帯状をなし、規模は長径6.1m、深さは16cmである。出土遺物には陶器・碗・擂鉢があり、時期は19世紀前葉である。

S K - 6（第14図）

A地区Q-10区で検出された土壙で、平面形は橢円形に近く、規模は長径3.1m、深さは47cmである。出土遺物は土師器・皿があり、時期は近世と思われる。

S K - 7（第14図）

A地区R-9区で検出された土壙で、SD-5に掘り込まれている。平面形は双円形で、規模は長径99cm、深さは19cmである。出土遺物には陶器・碗があり、時期は近世である。

S K - 8・焼土（第14図）

A地区R-9区で検出された大型の豎穴状の土壙である。平面形は橢円形で、規模は長径2.2m以

上、短径1.8m、深さは36cmである。床面は平坦で、2基の土壙がある。土壙は平面形は楕円形で長径48cm、深さ8cmのものと長径66cm、深さ24cmのものである。SK-8から南へ56cmの隣接した位置には焼土が確認されている。焼土は48cm×39cmの範囲で認められ、一部は他の土壙に壊されている。土壙と扱ったが、SK-8は2本柱穴の竪穴建物跡で焼土は屋外炉であった可能性も考えられる。SK-8の出土遺物には縄文土器があり、時期は縄文時代中期中葉の山田平式期である。

SK-9 (第15図)

B地区F-12区で検出された土壙で、平面形は楕円形と思われるが大半は調査区外である。規模は長径2.1m、深さは56cmである。出土遺物には陶器・碗があり、時期は19世紀後葉のものと思われる。

SK-10 (第15図)

B地区G-11区で検出された土壙で、平面形は楕円形で、長径76cm、深さは7cmである。出土遺物には縄文土器と陶器があり、時期は近世のものと思われる。

SK-11 (第15図)

B地区H-11区で検出された土壙で、平面形は隅丸長方形をなすものと思われるが、大半は調査区外である。規模は長径1.8m、深さは44cmである。出土遺物には陶器・擂鉢と石器・剥片が出土しており、時期は近世のものと思われる。

SK-12 (第15図)

B地区H-11区で検出された土壙で、木伐根跡と重複している。平面形は楕円形、規模は長径60cm、深さは8cmである。出土遺物には須恵器・坏身があり、時期は7世紀～9世紀と思われる。

SK-13 (第15図)

B地区H-12区で検出された土壙である。平面形は円形で、規模は径28cm、深さは16cmである。出土遺物には縄文土器、磁器があり、時期は近世と思われる。

SK-14 (第15図)

B区G-13区で検出された土壙で、中央部は水道管理設により壊されている。平面形は長楕円形に近いものと思われ、規模は長径2.9m、深さは20cmである。出土遺物には陶器・徳利？があり、時期は近世と思われる。

SK-15 (第15図)

B地区H-13・14区で検出された土壙で、平面形は長方形に比較的近く、規模は長径4.0m、短径2.5m、深さは27cmである。出土遺物には縄文土器があり、時期は縄文時代である。

S K-16 (第9図)

B地区F-11~13区で検出された溝状の土壙で、規模は長さ18.3m以上、幅65cm、深さは36cmである。床面は平坦である。出土遺物には縄文土器、土師器・皿があり、時期は近世のものと思われる。

S K-17 (第9図)

B地区H-14区で検出された土壙で、他の土壙と重複している。規模は長径1.4m以上、深さは22cmである。出土遺物には土師器・鍋があり、時期は近世である。

S K-18 (第9図)

B地区H-13区で検出された土壙で、平面形は橢円形で、規模は長径26cm、深さは11cmである。出土遺物にはチャートの剥片があり、時期は縄文時代の可能性がある。

S K-19 (第7図)

A地区M-7区で検出された土壙で、平面形は橢円形で、規模は長径108cm、深さは42cmである。出土遺物には土師器・鍋があり、時期は近世のものと思われる。

S K-20 (第7図)

A地区M-7・8区で検出された土壙で、SD-2と重複している。平面形は橢円形の土壙と思われ、規模は長径2.8m、短径1.6m、深さは19cmである。中央に土壙（径40cm、深さ7cm）が1基ある。出土遺物には土製円盤があり、時期は近世と思われる。

S K-21 (第7図)

A地区M-8区で検出された土壙で、平面形は橢円形、規模は長径1.2m、深さは30cmである。出土遺物には陶器・碗・擂鉢などがあり、時期は19世紀後葉と思われる。

S K-22 (第7図)

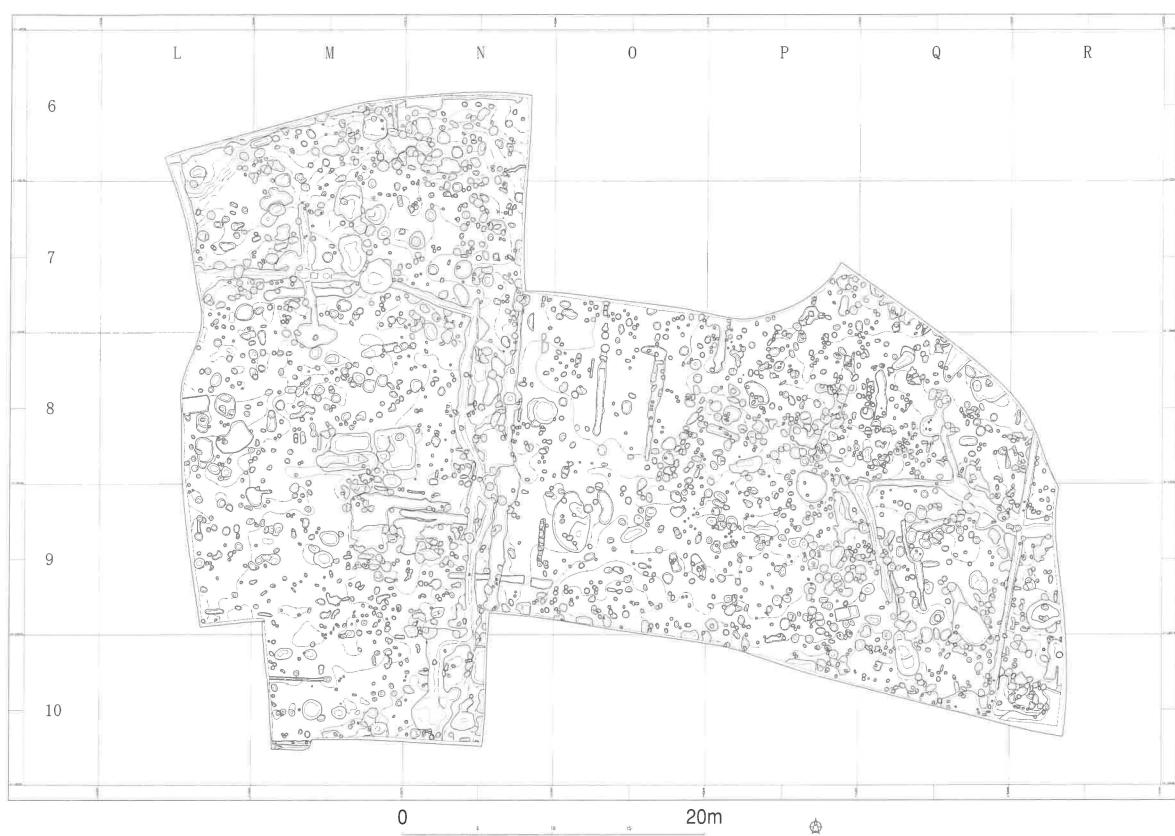
A地区N-8区で検出された土壙で、平面形はほぼ円形をなし、規模は径41cm、深さは20cmである。出土遺物には磁器・蓋があり、時期は近世のものと思われる。

S K-23 (第7図)

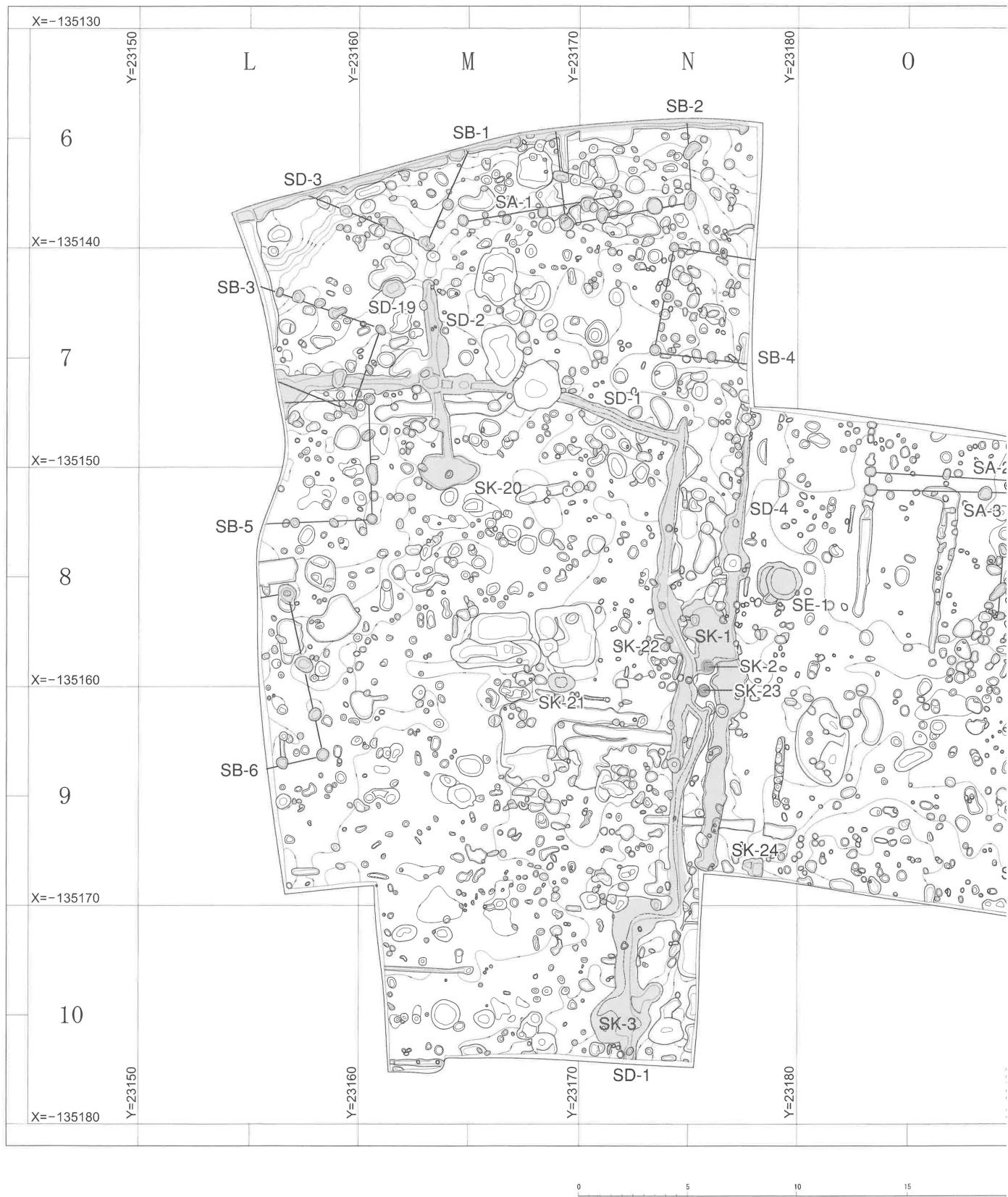
A地区N-9区で検出された土壙で、平面形は円形、規模は径53cm、深さは41cmである。出土遺物には陶器・鍋があり、時期は19世紀頃と思われる。

S K-24 (第7図)

A地区N-9区で検出された土壙で、平面形は方形に近く、規模は長径91cm、深さは22cmである。出土遺物には中世陶器・碗があり、時期は13世紀後半である。



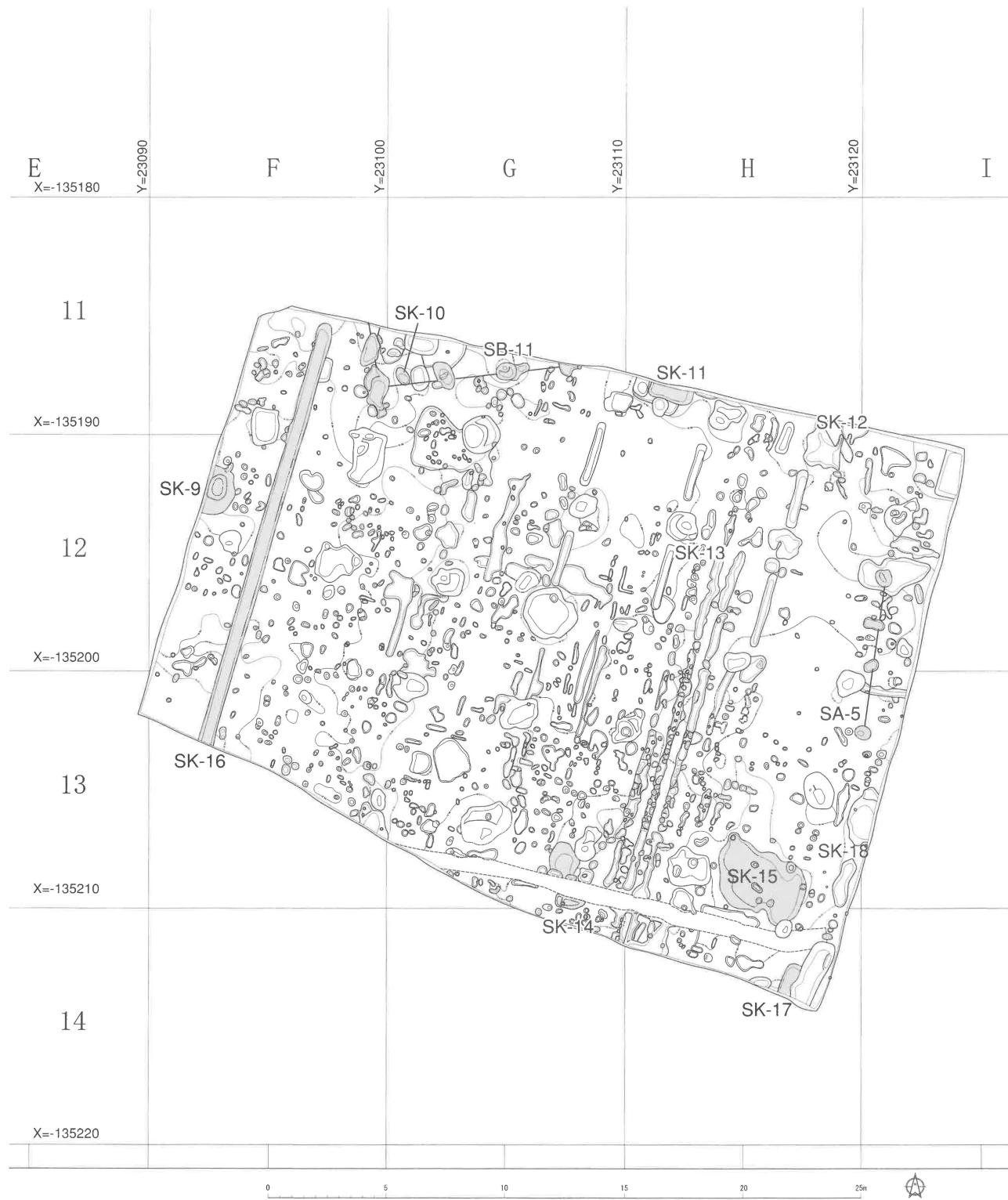
第6図 調査区（A地区）全体図（1／500）



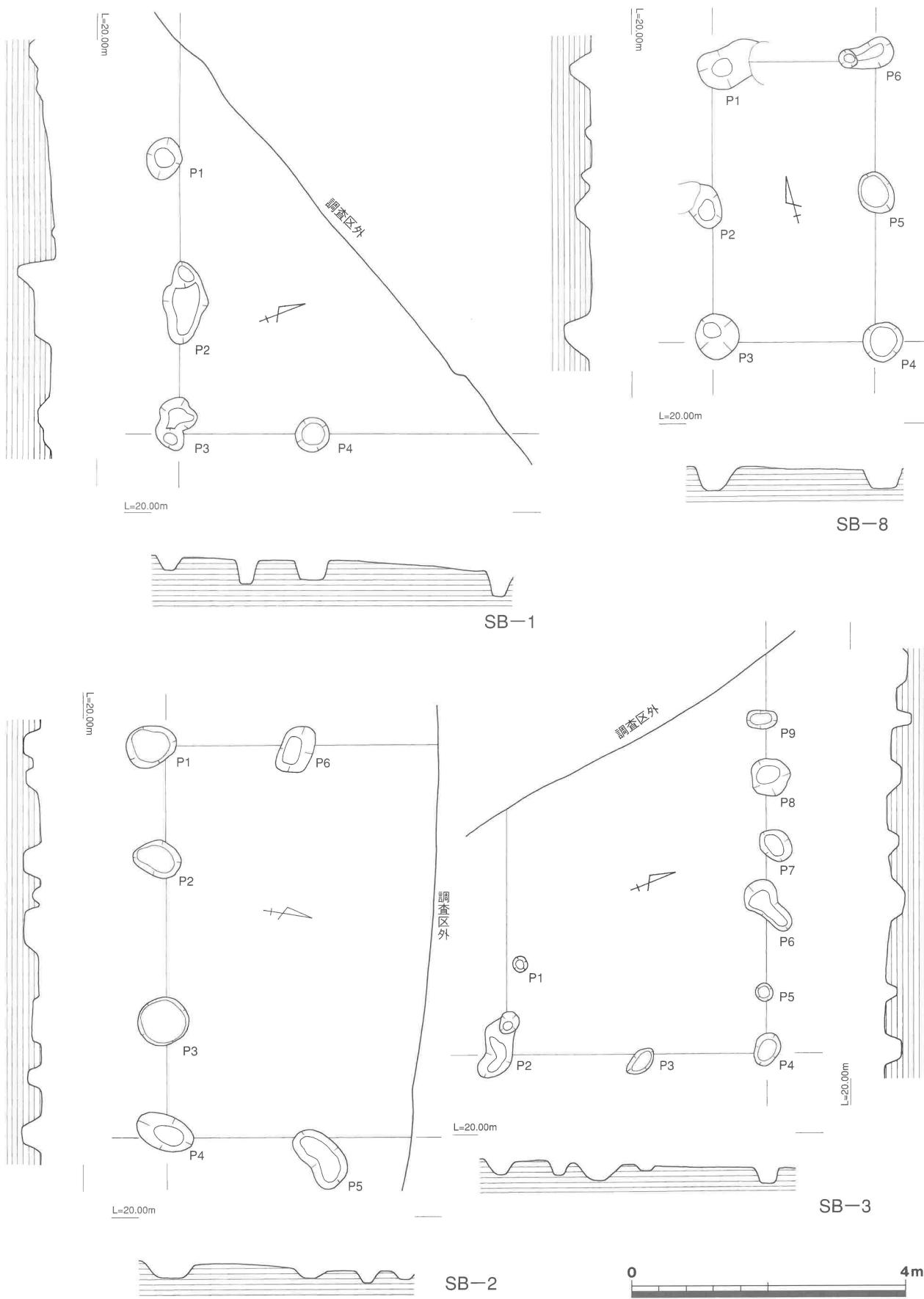
第7図 A地区遺構位置図-1 (1/250)



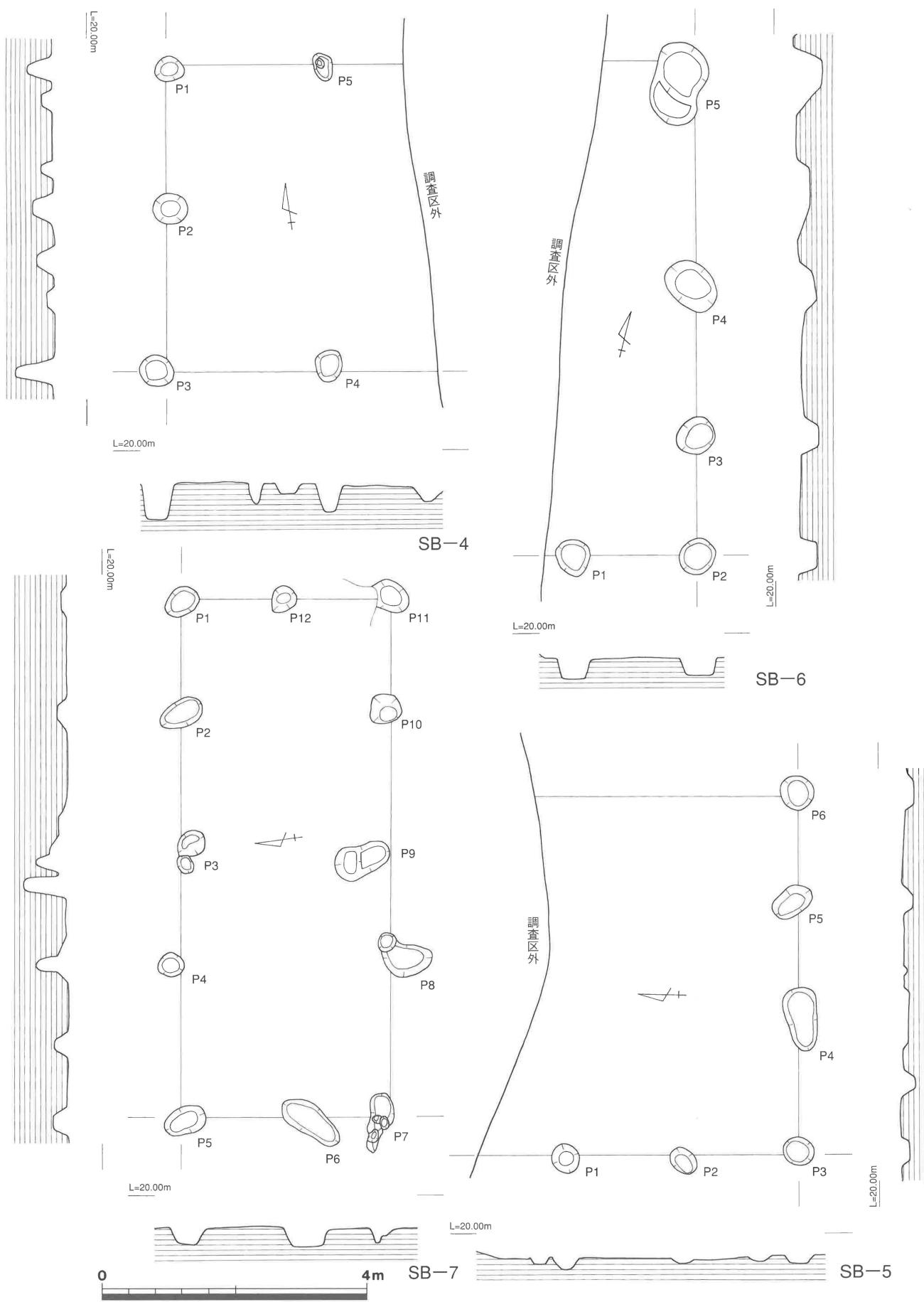
第8図 A地区遺構位置図-2 (1/250)



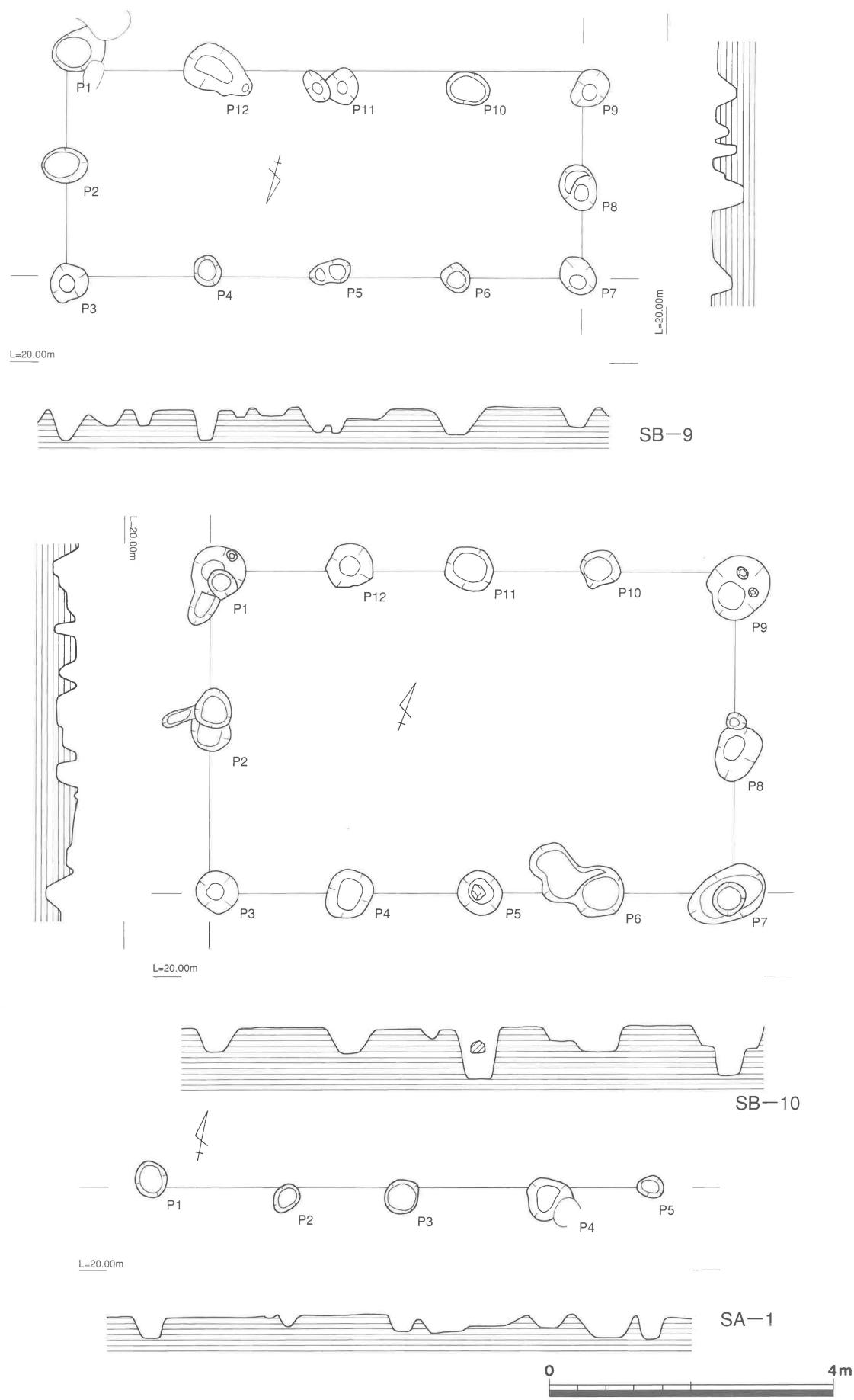
第9図 調査区（B地区）全体図（1／250）



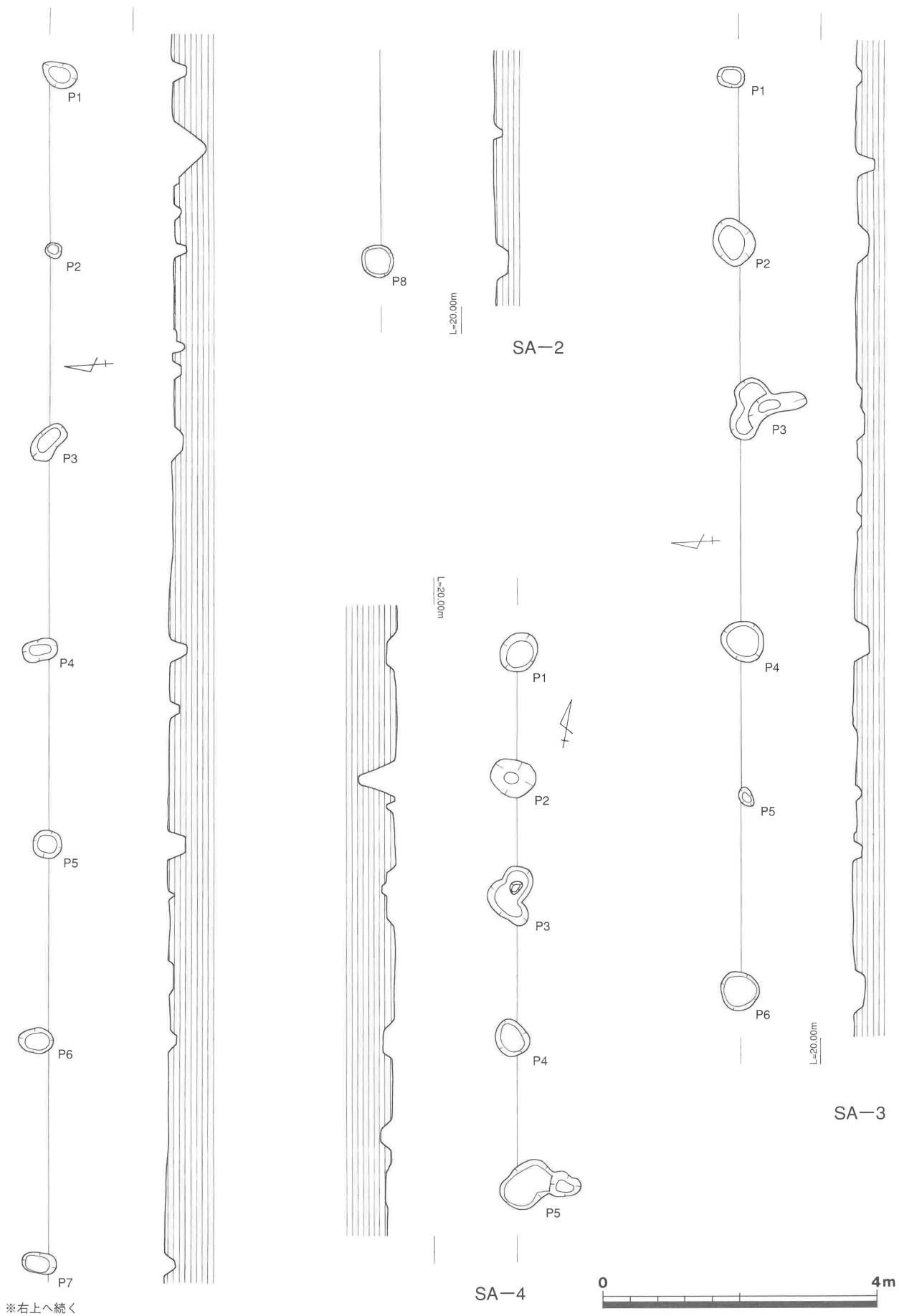
第10図 A地区遺構実測図-1 (1/80)



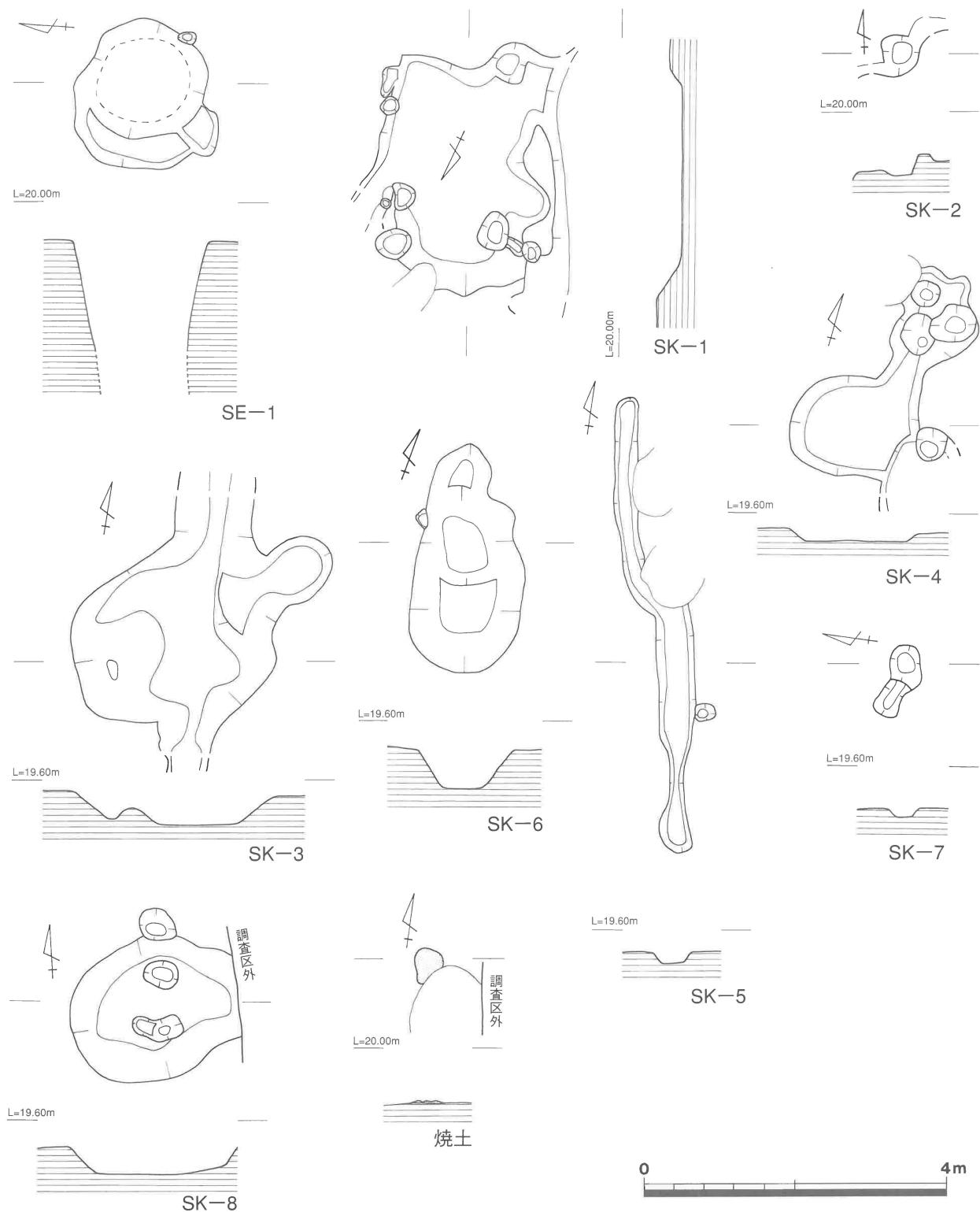
第11図 A地区遺構実測図-2 (1/80)



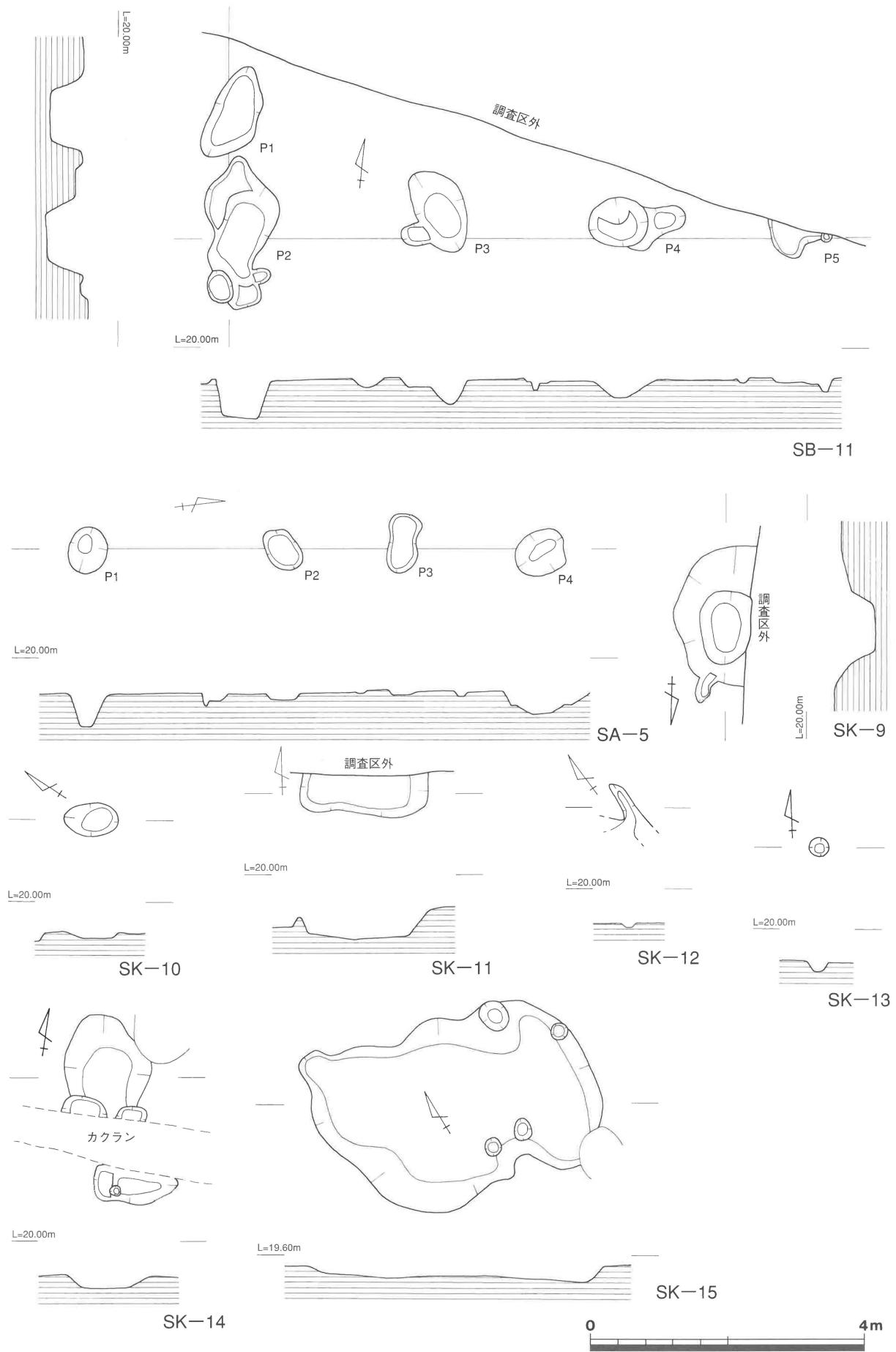
第12図 A地区遺構実測図一3 (1/80)



第13図 A地区遺構実測図一4 (1/80)



第14図 A地区遺構実測図-5 (1 / 80)



第15図 B地区遺構実測図 (1 / 80)

S K-25 (第8図)

A地区Q-8区で検出された土壙で、平面形は楕円形に近いものと思われるが、大半は調査区外である。規模は長径2.1m以上、深さは21cmである。出土遺物には土師器・釜があり、時期は近世である。

S K-26 (第8図)

A地区Q-8区で検出された土壙で、平面形は楕円形、規模は長径84cm、深さは8cmである。出土遺物には土師器・皿、時期は近世である。

S K-27 (第8図)

A地区Q-8区で検出された土壙で、平面形は円形、規模は径52cm、深さは41cmである。出土遺物には縄文土器があり、時期は縄文時代中期中葉の山田平式期のものと思われる。

2. 遺物 (第16~18図、第1表)

今回の調査で出土した遺物は、極端に少なく縄文土器、須恵器、中世陶器、陶器、磁器、土師器、瓦、石製品が、コンテナ箱(34×54×20cm)に2箱出土したのみであった。量的には近世の土師器が比較的多く出土している。以下、A地区、B地区を合わせて遺構ごとに遺物を説明する。なお、遺物についての細かな調整・法量等は第1表の観察表に記している。

S B-9 (第16図1・2)

1はP1から出土した縄文土器・深鉢の体部破片である。内外面は摩滅している。2はP12から出土した陶器・香炉の口縁部破片である。口縁端部が内側に肥厚されている。調整は内外面回転ナデである。

S B-11 (第18図57~61)

57はP1から出土した土師器・皿である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面板ナデで、外面ナデ・指押さえである。58・59はP2から出土した縄文土器・深鉢の口縁部破片である。内外面は摩滅しており、調整は不明である。60・61はP3から出土した土師器・皿である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面板ナデかナデで、外面ナデ・指押さえである。

S D-1 (第16図3~16)

3は縄文土器・深鉢の体部破片である。内外面は摩滅している。4・5は陶器・碗である。いわゆる広東碗で、削り出し高台である。調整は内外面回転ナデ、灰釉が施されている。内外面には呉須絵がみられる。6は磁器・碗である。箱形湯呑で口縁部を欠いている。調整は内外面回転ナデ、高台は削り出しで、外面には呉須絵がみられる。7は陶器・灯明皿である。内面に隆帯と芯受けがある。調整は内面回転ナデ、外面・底部回転ヘラケズリで、鉄釉が施されている。8は陶器・鉢である。口縁

部内面は折り返されている。調整は内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリで、灰釉が施されている。9は陶器・蓋である。摘み部を欠損している。調整は内外面回転ナデで、灰釉が施されている。10は陶器・匣鉢である。口縁部を欠損している。調整は内外面回転ナデで、底部に布目痕が認められる。11は陶器・蚊遣りの体部破片である。肩部に双耳が付いている。調整は内面板ナデ・指押さえ、外面板ナデである。12・13は土師器・皿である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面ナデか板ナデで、外面ナデ・指押さえである。14は土師器・鍋である。口縁は屈曲して段をなしている。調整は内外面ナデである。15は軒平瓦の破片である。瓦当面に唐草文様が認められる。16は砥石である。片面を用いて研いでいたようで、両端が磨り減っている。

S D - 2 (第16図17)

17は陶器・碗である。いわゆる広東碗で、削り出し高台である。調整は内外面回転ナデ、灰釉が施されている。内外面には呉須絵がみられる。

S D - 4 (第16図18)

18は陶器・皿である。口縁部はやや内湾し、端部は丸い。調整は内面回転ナデ、外面・底部回転ヘラケズリで、内外面に灰釉が施されている。

S D - 5 (第16図19)

10は陶器・徳利の底部破片と思われるものである。調整は内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、底部削り出し高台である。灰釉が施されている。

S D - 6 (第16図20)

20は陶器・擂鉢の口縁部破片である。口縁部は段をなして肥厚され、端部はやや平坦である。調整は内外面回転ナデで、鉄釉が施されている。

S K - 1 (第16図21・22)

21は陶器・碗の底部破片である。いわゆる腰鎬碗で、調整は内外面回転ナデ、削り出し高台で、灰釉が掛かる。22は土師器・鍋である。いわゆるほうろく鍋と思われ、口縁部は短く屈曲し、端部はナデ窪んでいる。調整は内外面ナデである。

S K - 2 (第16図23・24)

23は陶器・碗である。いわゆる腰鎬碗で、底部を欠損している。調整は内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、灰釉・鎬釉が施されている。24は陶器・灯明具である。内面の受台が欠損している。調整は内面回転ナデ、外面・底部回転ヘラケズリで、鉄釉が施されている。

SK-3 (第16図25)

25は陶器・擂鉢の底部破片である。底部は平底である。調整は内面クシメ、外面・底部回転ヘラケズリである。内面には使用痕が認められる。

SK-4 (第16図26)

26は陶器・猪口で、口縁部を欠損している。調整は内外面回転ナデ、底部ナデで、灰釉が掛けられている。

SK-5 (第16図27・28)

27は陶器・碗である。いわゆる丸碗で、底部を欠損している。調整は内外面回転ナデ、柿釉が施されている。28は陶器・擂鉢の口縁部破片である。口縁部は段をなして肥厚され、端部は丸い。調整は内外面回転ナデで、鉄釉が施されている。

SK-6 (第16図29)

29は土師器・皿の破片である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面板ナデ、外面ナデ・未調整である。

SK-7 (第16図30)

30は陶器・碗である。丸碗で口縁部を欠損している。調整は内面回転ナデで、外面は回転ヘラケズリ、底部は削り出し高台である。灰釉が掛けられている。

SK-8 (第16図31)

31は縄文土器・深鉢の口縁部破片である。口縁部は内湾し、端部でやや外反する。隆帯で連弧文が入れられ、外面にはL Rの縄文が施されている。

SK-9 (第18図62)

62は陶器・碗である。丸碗で口縁部は直立し、端部は丸い。調整は内面回転ナデで、外面は回転ヘラケズリ、底部は削り出し高台である。鉄釉が掛けられている。

SK-11 (第18図63・64)

63は陶器・擂鉢の底部破片である。底部は平底である。調整は内面クシメ、外面回転ヘラケズリで、底部には糸切り痕が認められる。内面には使用痕が認められる。内外面に鉄釉が掛かる。64は石器・剥片である。黒曜石を細長く割り、縁部に二次剥離が認められる。

SK-12 (第18図65)

65は須恵器・壺の底部破片である。底部は平底である。調整は内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズ

りである。

S K-14 (第18図66)

66は陶器・徳利の底部破片と思われるものである。調整は内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、底部には糸切り痕がある。外面に鉄釉が掛けられている。

S K-15 (第18図67)

67は縄文土器・深鉢の底部破片である。底部は平底で、底面からの立ち上がりは比較的緩やかである。調整は内外面ナデ、底部未調整である。

S K-16 (第18図68・69)

68は縄文土器・深鉢の体部破片と思われるものである。内外面摩滅のため、調整は不明である。69は土師器・皿の破片である。口縁部は内湾し、端部はやや丸い。調整は内面板ナデ、外面ナデ・指押さえである。

S K-17 (第18図70)

70は土師器・鍋である。いわゆるほうろく鍋と思われ、口縁部は短く屈曲し、端部はナデ窪んでいる。調整は内面板ナデ、外面ナデ・指押さえである。

S K-18 (第18図71)

71は石器・剥片である。チャートの細片であるが、二次剥離は認められない。

S K-19 (第16図32)

32は土師器・鍋である。いわゆるほうろく鍋と思われ、口縁部は短く屈曲し、端部はナデ窪んでいる。調整は内外面ナデである。

S K-20 (第16図33)

33は土製円盤としたが、焼成具合をみる粘土塊の可能性がある。半分以上を欠損しているが、粘土塊を押し潰して平坦にしてある。調整はナデである。

S K-21 (第17図34~40)

34は陶器・碗である。いわゆる広東碗で、削り出し高台である。調整は内外面回転ナデ、底部は削り出し高台で、灰釉が掛けられている。内外面には呉須絵がみられる。35・36は陶器・擂鉢である。口縁部は端部付近で肥厚され、端部はやや平たい。調整は内面クシメ、外面回転ヘラケズリで、底部には糸切り痕が認められ、全体に鉄釉が施されている。内面底部には使用痕が認められる。36の内面には大という押印文が2箇所ある。37は陶器・徳利と思われるもので、口縁部と底部を欠損している。

調整は内面回転ナデ、外面は上部回転ナデ、下部回転ヘラケズリである。外面に灰釉が掛けられている。38は陶器・蚊遣りである。上部を欠損するが、体部は直線的で、底部は平坦である。体部に穿孔がみられ、内面に張り出し部がある。調整は内面板ナデ・指押さえ、外面板ナデであり、内外面に煤が付着している。39は陶器・皿である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面ナデ、外面ナデ・指押さえである。40は土師器・羽釜である。口縁部は直立し、端部はややナデ曲げられている。体部に鍔がある。調整は内面板ナデで、外面板ナデ・指押さえで、外面に煤が付着している。

S K-22 (第17図41)

41は陶器・蓋である。摘み部を欠損している。調整は内外面回転ナデで、灰釉が施されている。

S K-23 (第17図42)

42は陶器・鍋である。いわゆる両手鍋で、口縁端部に一对の耳が付いている。口縁部は蓋が置けるように屈折して内面は平坦になっている。調整は内外面回転ナデで、柿釉が掛けられている。

S K-24 (第17図43)

43は中世陶器・碗である。口縁は直線的に延び、端部は丸い。調整は内面回転ナデである。

S K-25 (第17図44)

44は土師器・釜である。羽無釜と思われ、口縁部はほぼ直立し、肩部が張り出している。調整は内面板ナデ・指押さえ、外面ナデで、煤が付着している。

S K-26 (第17図45)

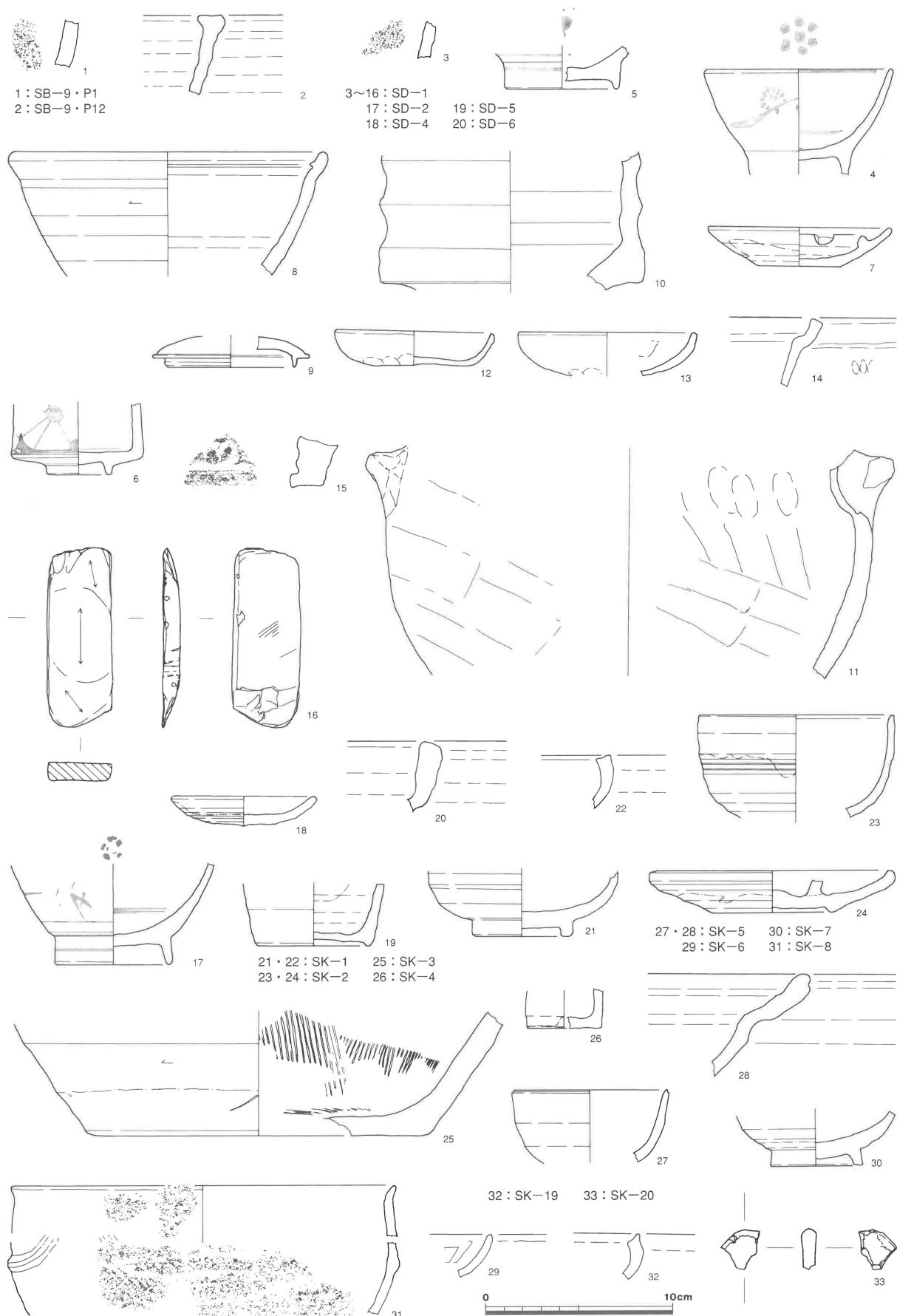
45は土師器・皿である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面板ナデ、外面ナデ・指押さえである。

S K-27 (第17図46)

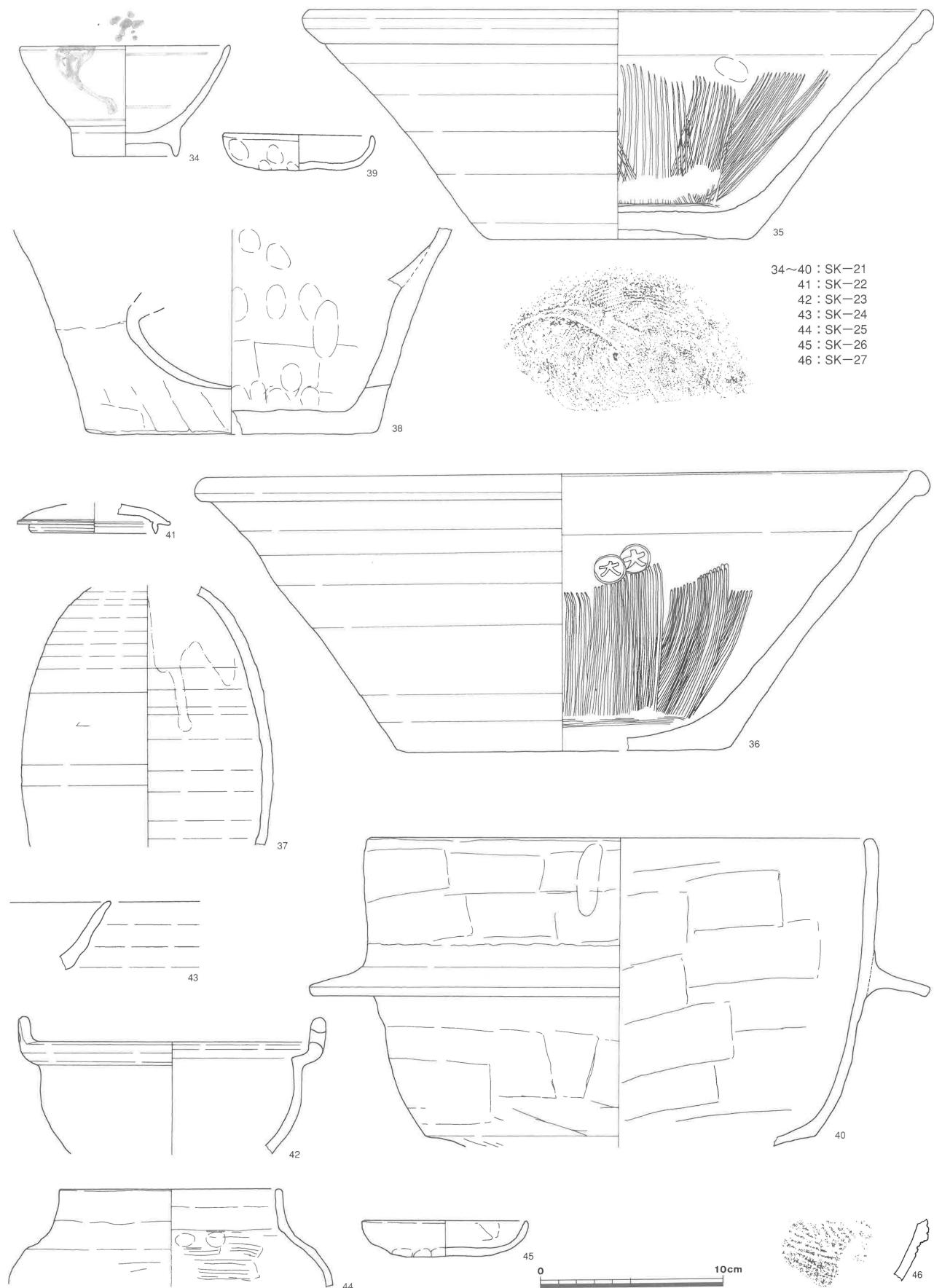
46は縄文土器・深鉢の口縁部付近の破片と思われる。外面は肥厚され、半截竹管による半隆起線文が斜位と横位に施され、その下に縄文がみられる。

表土 (第18図47~56・72~78)

47~56はA地区表土から出土した遺物である。47~49は縄文土器・深鉢と思われる破片である。47は口縁部破片で、端部は面をなしている。外面に縄文が施されている。48は半截竹管による半隆起線文が施されている。49は体部破片で、摩滅のため調整は不明である。50は弥生土器または土師器の壺体部破片である。調整は内外面摩滅のため不明である。51は陶器・碗の底部破片である。削り出し高台で、調整は内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリである。内外面に灰釉が掛かる。52は陶器・皿の口縁部破片である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリで、灰釉



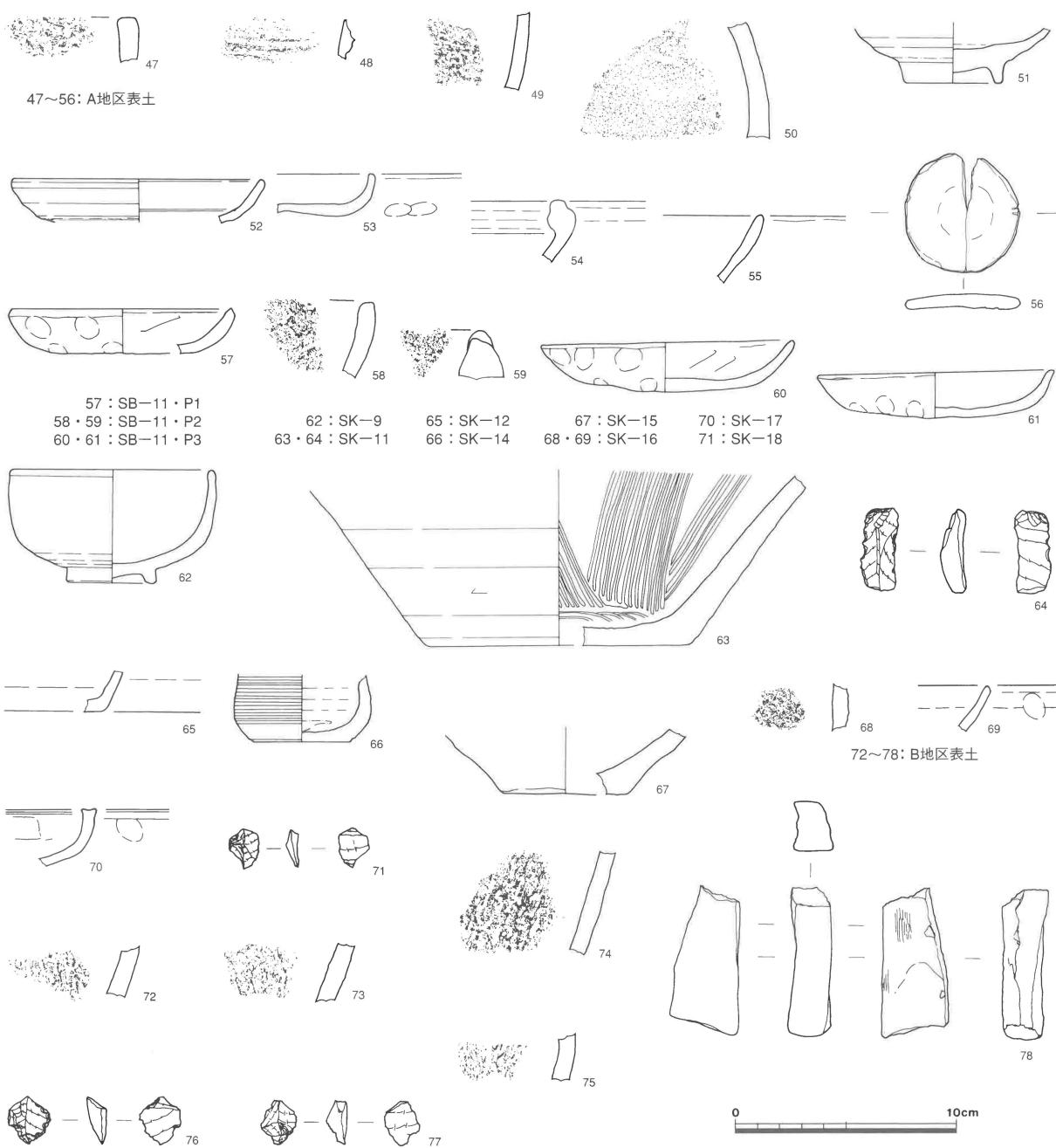
第16図 A地区出土遺物実測図一 1 (1 / 3)



第17図 A地区出土遺物実測図-2 (1/3)

が掛かっている。53は土師器・皿の破片である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面ナデ、外側未調整・指押さえである。54・55は土師器・鍋の口縁部破片である。54はほうろく鍋と思われ、口縁部は短く屈曲し、端部は平坦で内面が肥厚されている。調整は内外面ナデである。55は口縁部は外側傾し、端部は丸い。調整は内外面ナデである。56は土製円盤である。片側に湾曲して縁部は丸い。

72～78はB地区表土から出土した遺物である。72～75は縄文土器・深鉢の体部破片である。外側に削痕調整が認められる。76・77は石器・剥片である。76は黒曜石、77はチャートの細片であり、77には二次剥離が認められる。78は砥石の破片である。角張った砥石の両面を用いて研いでいたようで、両面が磨り減っている。



第18図 A地区出土遺物実測図一3・B地区出土遺物実測図 (1/3)

第1表 出土遺物観察表

遺物 NO.	地区・遺構	器種・分類	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整	備考	時期
16-1	A 地区 SB-9・P1	J 深鉢				やや粗	良好	橙茶色	内外面摩滅		縄文
2	A 地区 SB-9・P12	T 香炉				密	良好	乳褐色	内外面回転ナデ、灰釉		17c ~ 18c
3	A 地区 S D - 1	J 深鉢				密	良好	橙褐色	内外面摩滅		縄文
4	A 地区 S D - 1	T 碗	10.0 (5.8)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部削り出し高台、灰釉、吳須絵		19c 後
5	A 地区 S D - 1	T 碗		(2.4)	6.0	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部削り出し高台、灰釉、吳須絵		19c 後
6	A 地区 S D - 1	Z 碗		(3.9)	5.4	密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、底部削り出し高台、灰釉、吳須絵		19c 中
7	A 地区 S D - 1	T 灯明皿	9.7	2.2	4.5	密	良好	灰色	内面回転ナデ、外面・底部回転ヘラケズリ、鉄釉		19c 前
8	A 地区 S D - 1	T 鉢	16.6 (6.8)			密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、灰釉、		19c 前
9	A 地区 S D - 1	T 蓋		6.7 (1.7)		密	良好	青灰色	内外面回転ナデ、灰釉		近世
10	A 地区 S D - 1	T 匣鉢		(7.6)		密	良好	茶色	内外面回転ナデ、底部布目痕、鉄釉、		近世
11	A 地区 S D - 1	T 蚊遣り		(12.5)		密	良好	淡橙色	内面板ナデ、指押さえ、外面板ナデ、内面煤付着		近世
12	A 地区 S D - 1	H 皿	8.4	2.0		密	良好	灰褐色	内面ナデ、外面ナデ・指押さえ		近世
13	A 地区 S D - 1	H 皿		9.3 (2.4)		密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ		近世
14	A 地区 S D - 1	H 鍋				密	良好	灰色	内外面ナデ		近世
15	A 地区 S D - 1	N 軒平瓦				密	良好	暗灰色	外面ナデ、押型文		近世
16	A 地区 S D - 1	R 砥石	長さ 9.3、幅 3.5、厚さ 1.0	石質は砂岩							近世
17	A 地区 S D - 2	T 碗		(5.5)	6.2	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部削り出し高台、灰釉、吳須絵		19c 中
18	A 地区 S D - 4	T 皿	7.4	1.1	3.3	密	良好	灰褐色	内面回転ナデ、外面・底部回転ヘラケズリ、灰釉		18c 中
19	A 地区 S D - 5	T 德利		(3.4)	5.9	密	良好	灰褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、削り出し高台、灰釉		19c 頃
20	A 地区 S D - 6	T 播鉢				密	良好	褐色	内外面回転ナデ、鉄釉		18c 後
21	A 地区 S K - 1	T 碗				密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、削り出し高台、鉄釉		19c
22	A 地区 S K - 1	H 鍋				密	良好	褐色	内外面ナデ、煤付着		近世
23	A 地区 S K - 2	T 碗	10.4 (5.6)			密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、灰釉、鉄釉		18c 中
24	A 地区 S K - 2	T 灯明具	12.6 (2.3)	6.4		密	良好	灰褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、削り出し高台、鉄釉		18c 中
25	A 地区 S K - 3	T 播鉢		(6.1)	16.8	密	良好	褐色	内面クシメ、外面・底部回転ヘラケズリ、鉄釉、使用痕		近世
26	A 地区 S K - 4	T 猪口		(2.0)	4.2	密	良好	灰色	内外面回転ナデ、底部ナデ、灰釉		近世
27	A 地区 S K - 5	T 碗	8.2 (3.9)			密	良好	茶色	内外面回転ナデ、柿釉		18c ?
28	A 地区 S K - 5	T 播鉢				密	良好	淡褐色	内面回転ナデ、鉄釉		19c 前
29	A 地区 S K - 6	H 皿				密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面ナデ・未調整		近世
30	A 地区 S K - 7	T 碗		(2.8)	4.9	密	良好	灰褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、削り出し高台、灰釉		近世
31	A 地区 S K - 8	J 深鉢				密	良好	茶褐色	外面隆帯・縄文 (LR) 、内面摩滅		山田平式
32	A 地区 S K - 19	H 鍋				密	良好	茶褐色	内外面ナデ、煤付着		近世
33	A 地区 S K - 20	D 土製円盤				密	良好	淡灰色	外面ナデ		近世
17-34	A 地区 S K - 21	T 碗	11.6	6.2	5.8	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部削り出し高台、灰釉、吳須絵		19c 後
35	A 地区 S K - 21	T 播鉢	34.0	12.9	14.4	密	良好	暗褐色	内面クシメ、外面回転ヘラケズリ、底部糸切り痕、鉄釉		19c 後
36	A 地区 S K - 21	T 播鉢	39.2	15.6	17.0	密	良好	淡褐色	内面クシメ、外面回転ヘラケズリ、底部糸切り痕、鉄釉		19c 後
37	A 地区 S K - 21	T 德利		(14.6)		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、灰釉		19c 頃
38	A 地区 S K - 21	T 蚊遣り		(11.5)	13.6	密	良好	淡橙色	内面板ナデ、指押さえ、外面板ナデ、内外面煤付着		近世
39	A 地区 S K - 21	H 皿	8.1	2.2		密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面ナデ・指押さえ		近世
40	A 地区 S K - 21	H 羽釜	27.7 (17.4)			密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面板ナデ・指押さえ、外面煤付着		近世
41	A 地区 S K - 22	T 蓋	6.7 (1.6)			密	良好	青灰色	内外面回転ナデ、灰釉		近世
42	A 地区 S K - 23	T 鍋	16.6 (7.7)			密	良好	茶色	内外面回転ナデ、双耳、柿釉		19c 頃
43	A 地区 S K - 24	P 碗				密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ		13c 後半
44	A 地区 S K - 25	H 釜	12.2 (5.4)			密	良好	橙褐色	内面板ナデ・指押さえ、外面ナデ、外面に煤付着		近世
45	A 地区 S K - 26	H 皿	9.6	2.2		密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ		近世
46	A 地区 S K - 27	J 深鉢				密	良好	橙褐色	内面摩滅、外面半隆起線文、縄文		山田平式
47	A 地区表土	J 深鉢				密	良好	暗褐色	内面ナデ、外面縄文 (R L)		縄文中期
48	A 地区表土	J 深鉢				密	良好	橙褐色	内面摩滅、外面半隆起線文、縄文		縄文中期
49	A 地区表土	J 深鉢				密	良好	茶褐色	内外面摩滅		縄文
50	A 地区表土	Y or H 壺				密	良好	淡褐色	内外面摩滅		弥生～古墳
51	A 地区表土	T 碗		(2.5)	4.4	密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、削り出し高台、灰釉		18c 頃 ?
52	A 地区表土	T 皿	11.3 (2.0)			密	良好	淡褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、灰釉		17c ~ 18c
53	A 地区表土	H 皿				密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指押さえ・未調整		近世
54	A 地区表土	H 鍋				密	良好	褐色	内外面ナデ		19c 頃
55	A 地区表土	H 鍋				密	良好	褐色	内面ナデ、外面煤付着		近世
56	A 地区表土	D 土製円盤	径 5.4、厚さ 0.6			密	良好	茶褐色	内外面ナデ		近世 ?
57	B 地区 SB-11・P1	H 皿	10.0	2.1		密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ		近世
58	B 地区 SB-11・P2	J 深鉢				密	良好	橙褐色	内外面摩滅		縄文
59	B 地区 SB-11・P2	J 深鉢				密	良好	茶褐色	内外面摩滅		縄文
60	B 地区 SB-11・P3	H 皿	11.4	2.4		密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ		近世
61	B 地区 SB-11・P3	H 皿	10.7	2.3		密	良好	淡橙褐色	内面ナデ、外面ナデ・指押さえ		近世
62	B 地区 S K - 9	T 碗	9.0	5.3	3.8	密	良好	茶色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、削り出し高台、鉄釉		19c 後
63	B 地区 S K - 11	T 播鉢		(7.9)	11.8	密	良好	淡褐色	内面クシメ、外面回転ヘラケズリ、底部糸切り痕、鉄釉		近世
64	B 地区 S K - 11	R 剥片	長さ 3.9、幅 1.5、厚さ 1.1、石質は黒曜石								縄文

遺物 NO.	地区・遺構	器種・分類	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整	備考	時期
18-65	B 地区 SK-12	S 壱身			密		良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		7c ~ 9c
66	B 地区 SK-14	T 德利	(3.1)	4.4	密		良好	茶褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り痕、鉄釉		近世
67	B 地区 SK-15	J 深鉢	(3.1)	5.6	密		良好	茶褐色	内外面ナデ、底部未調整		縄文
68	B 地区 SK-16	J 深鉢			密		良好	黄褐色	内外面摩滅		縄文
69	B 地区 SK-16	H 皿			密		良好	乳褐色	内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ		近世
70	B 地区 SK-17	H 鍋			密		良好	茶褐色	内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ、煤付着		近世
71	B 地区 SK-18	R 剥片	長さ 1.8、幅 1.3、厚さ 0.5、石質はチャート								縄文
72	B 地区表土	J 深鉢			密		良好	茶褐色	内面摩滅、外面削痕		縄文晚期
73	B 地区表土	J 深鉢			密		良好	茶褐色	内面摩滅、外面削痕		縄文晚期
74	B 地区表土	J 深鉢			密		良好	茶褐色	内面摩滅、外面削痕		縄文晚期
75	B 地区表土	J 深鉢			密		良好	茶褐色	内面摩滅、外面削痕		縄文
76	B 地区表土	R 剥片	長さ 1.2、幅 1.9、厚さ 0.8、石質は黒曜石								縄文
77	B 地区表土	R 剥片	長さ 2.1、幅 1.6、厚さ 0.9、石質はチャート								縄文
78	B 地区表土	R 砥石	長さ 6.1、幅 1.7、厚さ 3.1、石質は砂岩？								中世～近世

* J - 縄文土器 Y - 弥生土器 S - 須恵器 K - 灰釉陶器 P - 中世陶器 T - 陶器 Z - 磁器 H - 土師器 R - 石製品

N - 瓦製品 D - 土製品

法量の単位は cm、() は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。

3. まとめ

中郷西遺跡は、平成2年度に行われた範囲確認調査で新たに確認された遺跡である。遺跡は中世～近世を中心とし、遺構密度はかなり希薄であることが推測されている。今回の発掘調査は、中郷西遺跡において初めて行われた本格的な発掘調査である。ここでは、今回の調査によって判明したことをまとめることとする。

まず、縄文時代の遺構や遺物が検出されたのは予想外であった。出土した縄文土器は、中期中葉の山田平式がA地区の東端から、晩期頃のものと推測されるものがB地区から少量出土している。また山田平式期の竪穴状遺構SK-8と焼土が確認されており、これはキャンプサイト的な簡易建物であった可能性が考えられる。この他に縄文の土壙も若干は確認されている。また、風倒木痕と思われる土壙も散在して確認されている。隣接する中郷遺跡では、前期と思われる土器片1点と晩期の土器片・遺構が確認されている。中期中葉の遺構・遺物は西方にある洗島遺跡と同時期であり、中郷遺跡や洗島遺跡との関連性が考えられよう。

次の弥生時代から中世にかけては遺物が殆ど出土していない。当初は中世の遺跡と考えていたため、この結果は予想外であった。遺物がみられないことから、この時期には人々がここで居住・活動をしていなかったものと考えられる。

主体となる時期は近世、特に19世紀である。屋敷の区画溝や遺構の殆どは18～19世紀のものと思われ、11棟確認できた掘立柱建物もその頃のものと思われる。検出できた溝は30m以上の間隔があり、かなり広範囲な屋敷地の区割りが想定される。建物ではSB-8～10の3棟が重複しており、長期にわたって居住していた様子が窺われる。また、建物は復元できなかったが、土壙が多数検出されていることから、もっと数多くの掘立柱建物が存在していたものと考えられる。ただ、遺構の数の多さと比較すると遺物はコンテナ3箱未満と極端に少ない。この傾向は隣接する中郷遺跡でも同様である。中郷遺跡は中世後期～近世を中心とする遺跡であり、中郷西遺跡より若干時期が古い。調査では掘立柱建物多数と多くの土壙が検出されたが、遺物はコンテナ1箱未満であった。両遺跡は非常に似ているのが特徴である。遺物の少なさは範囲確認調査での所見と同じである。ただ、両遺跡とも検出された遺構数からすると、長期的に継続した集落であることは予想される。中郷遺跡、中郷西遺跡は関連性が高く、中世後期の中郷集落が近世になって拡大して中郷西遺跡が成立した可能性があり、近世においては同一の集落であったことは想定される。近世では、眼鏡川沿いに集落が展開していたものと思われる。

以上まとめると、中郷西遺跡は近世、特に19世紀に眼鏡川に面した台地縁部に形成された集落と結論付けられる。また、縄文時代においても人々は何らかの活動をしており、縄文時代ではキャンプサイト的な遺跡であったものと解釈できよう。

西側北遺跡

第4章 西側北遺跡

西側北遺跡の調査では、主に縄文時代の集落と古墳（西側北1号墳）が確認されている。ここでは古墳に伴うもの以外の遺構・遺物をまとめて説明する。古墳に関しては次章で改めて説明する。

1. 遺構

遺構は、竪穴住居（S B）、溝（S D）・土壙（S K）等が検出されている。ここでは各遺構を種類ごとに説明し、土壙に関しては遺物を出土したものを中心に記載する。なお、各遺構の規模等は検出面で測った数値である。

A. 竪穴住居（第20・21図）

竪穴住居は古墳の西側北1号墳下から3軒が検出されている。これら竪穴住居の埋土は全て地山土（黄褐色粘質土層）に類似しており、遺物が多数出土したS B-1以外は、その検出は難しい状況であった。

S B-1（第20・21図）

F-3区で検出された竪穴住居である。平面形は隅丸方形または隅丸長方形をなすものと思われるが、大半は工事用道路で壊されている。規模は南北1.8m以上、東西1.6m以上である。主軸方位はN-38°-Eである。埋土は黒褐色砂質土である。住居壁は比較的急傾斜で深さは最大約17cmだが、段丘の傾斜に従って住居壁も北側で途切れている。壁溝は確認されていない。床面は比較的平坦であるが、北側は緩やかに傾斜して下がっている。炉は確認できていない。壁面を巡る垂木跡については明確なものはない。住居の床面に2基の土壙があり、柱穴の可能性がある。P1は円形をなし、径18cm、深さ19cmである。P2は長径28cm、深さ8cmの橢円形をなしている。P1・P2を柱穴と考えると、柱穴は環状配置の可能性がある。

遺物は住居内北西側のP1周辺から縄文時代前期中葉の北白川下層IIc式の土器が、住居壁近くで骨片が出土している（第21図）。出土遺物から、竪穴住居の時期は前期中葉の北白川下層IIc式期と思われる。

S B-2（第20・21図）

F-3・4区で検出された竪穴住居である。住居南東側は工事用道路で壊され、北側の一部はS B-1と重複している。平面形は円形に近いが、住居南側が突出していることから六角形または五角形になる可能性もある。規模は長径4.0m以上、短径3.7m以上である。主軸方位はN-2°-Eである。埋土は暗黄褐色砂質土である。住居壁は深さ最大約4cmと掘り込みは非常に浅く、段丘の傾斜に従

って北側で途切れている。壁溝は確認されていない。床面は平坦である。住居の北西よりに焼けた礫が密集しており、ここを炉と考えた。炉は敷石炉と思われ、8～12cm大の8個の礫を34cm×28cmの範囲に敷いており、各礫は焼けて赤化していた。敷石炉は床面より若干高く検出され、掘り込んで敷かれたのではない。敷石炉の下には土壙が確認できたが、住居以前の土壙で、炉とは関係なかった。

住居の壁面には垂木跡と考えられる土壙が巡っている。これらの土壙は最大径が16～30cm、深さ10～27cmで、11基以上（P 6～P 17）が検出されている。柱穴の特定は困難であり、床面には多数の土壙が確認できたが、明確に柱穴とわかるものは無かった。ただ、住居内の土壙の中で比較的大きくて深く、柱穴の可能性のあるものにはP 1～P 5がある。P 1は橢円形をなし、長径は54cm、深さは27cmである。P 2は円形で径31cm、深さ7cm、P 3は円形で径32cm、深さ12cm、P 4は橢円形で長径40cm、深さ10cm、P 5は橢円形で長径44cm、深さ34cmである。これらを柱穴とすると、六角形または五角形の柱穴配置の可能性がある。

出土遺物は少ないが、住居内から縄文時代前期中葉の北白川下層Ⅱc式と石鏸（第21図）が、P 7から前期と思われる土器が出土している。このことから住居は前期中葉の北白川下層Ⅱc式期と思われる。

S B-3 (第20図)

E・F-3・4区で検出された竪穴住居である。住居北側は工事用道路で壊され、西側は崖の浸食によって無くなっている。S B-2と類似し平面形は円形に近いが、住居南側が突出して角張ることから、やはり六角形または五角形になる可能性もある。規模は長径4.8m以上、短径2.8m以上である。主軸方位はN-36°-Eである。埋土は暗黄褐色砂質土である。住居壁は深さ最大約7cmと掘り込みは非常に浅く、段丘の傾斜に従って北側で途切れている。壁溝は確認されていない。床面は平坦である。炉は確認されていない。

住居の壁面には垂木跡と考えられる土壙が比較的等間隔で巡っている。これらの土壙は最大径24～60cm、深さ7～8cmと様々で、7基以上（P 5～P 11）が検出されている。柱穴については、特定が困難であった。床面には多数の土壙が確認できたが、明確に柱穴とわかるものは無かった。ただ、住居内には比較的深い土壙があり、これらは柱穴の可能性がある。柱穴の可能性があるものにはP 1～P 4がある。P 1は橢円形をなし、長径は32cm、深さは28cmである。P 2は円形で径20cm、深さ34cm、P 3は円形で径31cm、深さ25cm、P 4は円形で径29cm、深さ32cmである。これらを柱穴とすると、六角形または五角形などの多角形の柱穴配置が考えられる。

出土遺物は少ないが、住居内から縄文時代前期中葉の北白川下層Ⅱc式と思われる土器が出土している。このことから住居は前期中葉の北白川下層Ⅱc式期と思われる。

B. 溝（第19図）

溝は、古墳の周溝を除くと1条が確認されている。

SD-1 (第19図)

E・F・4・5区で検出された溝で、古墳の周溝南端と重複して調査区外へ続いている。溝は古墳周溝に沿ってN-55°-Wの方向に直線的に延びている。溝の検出長は10.5m、最大幅は0.9mで、溝の床面は平坦で深さは5~10cmと比較的浅い。溝の幅は比較的一定で、西側へ傾斜している。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には古墳時代の土師器小片が1点あるが、周溝を壊した際の混入と考えられる。その他の出土遺物が無いことから、溝の時期は不明である。

C. 土壙 (第19・20・22図)

土壙は、大小様々な形態のものが調査区全体から多数検出されている。ここでは遺物が出土している土壙を中心に述べるものとする。

SK-1 (第19・22図)

E-4区で検出された、土器棺を据えるために掘られた土壙である。他の土壙と一部が重複しているが、平面形は楕円形で、規模は長径74cm、短径66cm、深さは25cmである。土器棺が傾く土壙北側の縁が3cmほど掘り下げられてテラス状になっている。埋土は茶褐色砂質土である。土壙内からは弥生時代中期前葉の岩滑式土器の甕と壺が出土しており(第22図)、壺に甕で蓋をした土器棺である。壺は当初から口縁部を欠いており、更に骨を入れやすいようにするためか頸部の一部も打ち欠かれていた。土器棺の主軸の方位はN-40°-Wであり、更に40°程傾けて据えている。この壺の肩部まで甕がかぶせられている。この土器棺は、地山より12cm程上の黒褐色砂質土中で検出され、標高14.65mの高さで水平に割れており、破片は土器棺内や周辺に散乱していた。これは次章で説明するが、古墳築造の際に黒褐色砂質土層を整地した際に割られたものと考えられる。

壺内の堆積物をみると、壺内の最下層に炭混じりの赤褐色砂質土が、最大で4cmの厚さで堆積していた。この埋土を分析したところリン及び水銀朱が検出され、再葬された骨が土化したものと思われる。特に水銀朱はこの層のみにあり、土器棺内には塗られていないことから、骨に掛けたか骨そのものを塗り、骨と共に土化したものと思われる。この層の上には、土器棺埋設以降に体部割れ口から流入したと思われる黄褐色砂質土と黒褐色砂質土の混ざった土が堆積している。この土は割れ口側で厚くて最大22cmの厚さで堆積している。これらの層を覆うように旧表土である黒褐色砂質土が壺内に堆積している。この層下部には、蓋となっていた甕の底部や体部などが含まれており、整地で割られた際に甕破片が壺内に流入したものと考えられる。

さて土壙の時期であるが、土器棺はその文様等の特徴から弥生時代中期前葉の西三河を中心に分布する岩滑式期(新段階)ものと考えられ、在地に分布する続水神平式のものではなかった。甕に付着した外面炭化物については炭素14年代測定を行っている(第4章3.B参照)。

SK-2 (第19・22図)

E-4区で検出された土壙で、中央部分をSD-1が壊している。平面形は隅丸長方形であり、規

模は長辺1.8m、短辺0.9m、深さは18cmであり、床面は平坦である。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には灰釉陶器・碗がある。また刀子（第36図8）が土壙北側より出土している（第22図）。土壙の規模、形状、及び出土遺物からSK-2は土壙墓であった可能性が考えられる。土壙の帰属時期は、土器より11世紀のものと思われる。

SK-3（第20図）

E-4区で検出された土壙で、平面形は方形に近く、北側にオーバーハングしている。規模は長辺1.3m、短辺1.0m、深さは0.7m、床面は平坦である。埋土は暗褐色砂質土である。出土遺物は無く時期は不明であるが、近世から近代の貯蔵穴の可能性がある。

SK-4（第20図）

F-4区で検出された土壙で、平面形は円形で、西側にオーバーハングしている。規模は径1.3m、深さは1.0m、床面は平坦である。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物は無く時期は不明であるが、SK-3と同様、近世から近代の貯蔵穴の可能性がある。

SK-5（第20図）

F-5区で検出された土壙で、古墳周溝やSD-1と重複している。平面形はほぼ方形であり、規模は長辺1.5m、短辺1.4m、深さは17cmであり、床面は平坦である。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には須恵器・壺、灰釉陶器・碗、中世陶器・碗・鉢、土師器・甕、製塩土器がある。出土遺物より土壙の帰属時期は、11世紀中葉のものと思われる。

SK-6（第20図）

F-3区で検出された土壙で、平面形はほぼ円形、規模は径22cm、深さは30cmである。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には前期中葉の北白川下層Ⅱc式土器があり、時期は前期中葉の北白川下層Ⅱc式のものと思われる。

SK-7（第20図）

F-4区で検出された土壙で、他の土壙が重複している。平面形は橢円形、規模は長径64cm、短径32cm、深さは12cmである。埋土は淡茶褐色砂質土である。出土遺物には土師器細片があり、時期は古墳～古代のものと思われる。

SK-8（第12図）

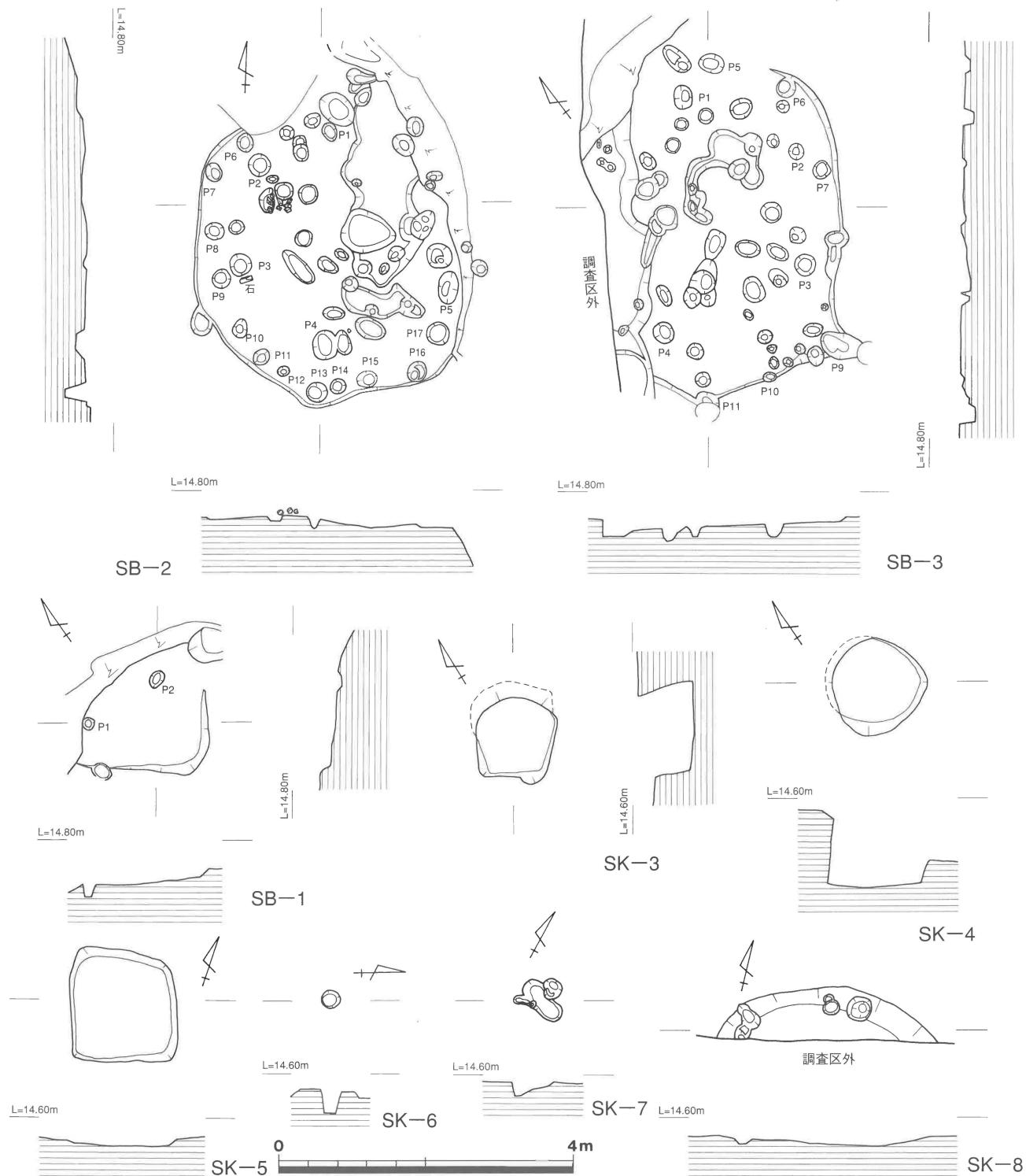
F-5区で検出された大型の浅い土壙で、大半は調査区外である。規模は長径2.9m以上、短径0.7m以上、深さは11cmである。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物は無く時期は不明である。SK-8に平行した調査区外の地形が若干高まっており、低墳丘古墳の可能性がある。もし、これが古墳とするとSK-8は古墳周溝の可能性がある。



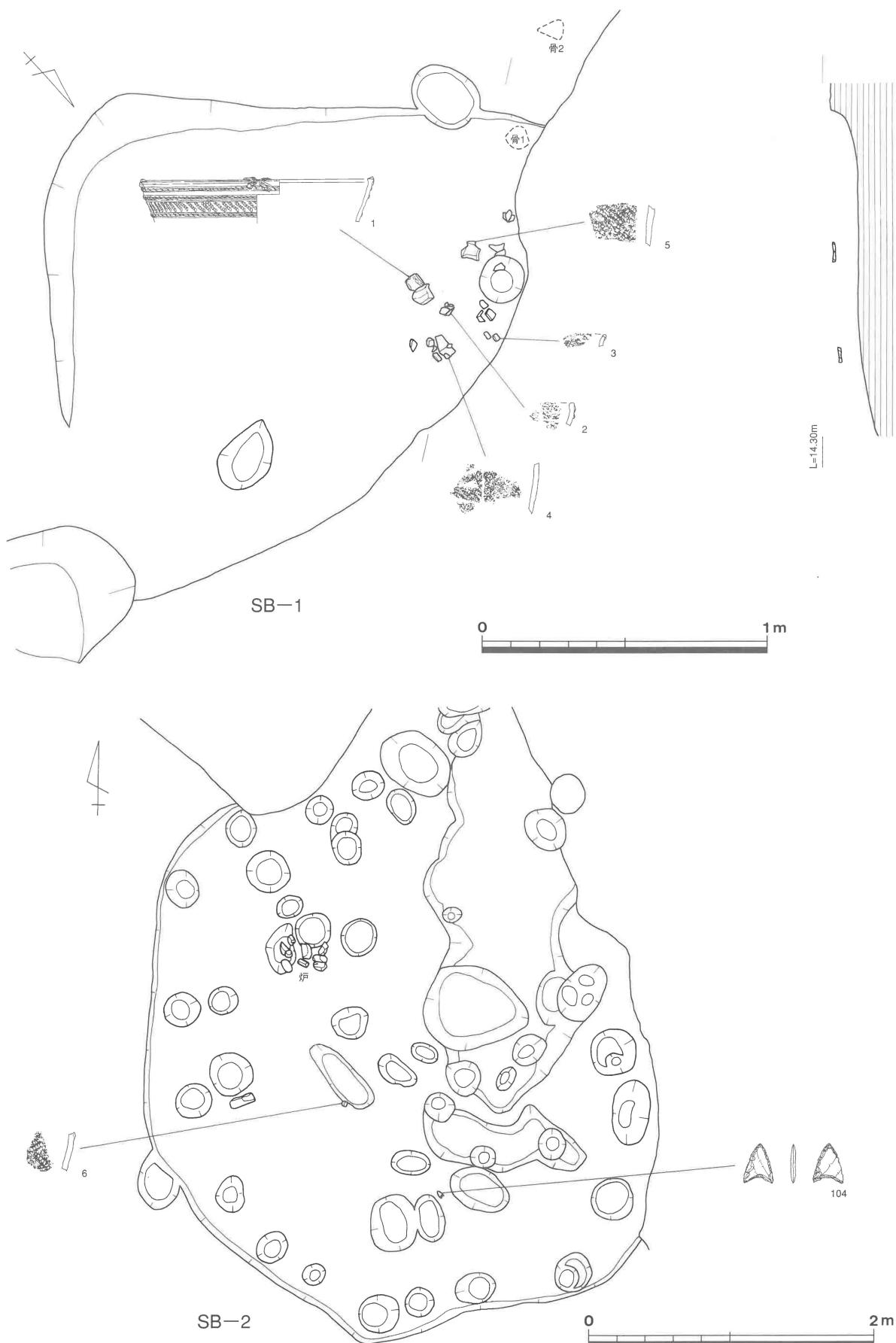
第19図 調査区全体図 (1/100)

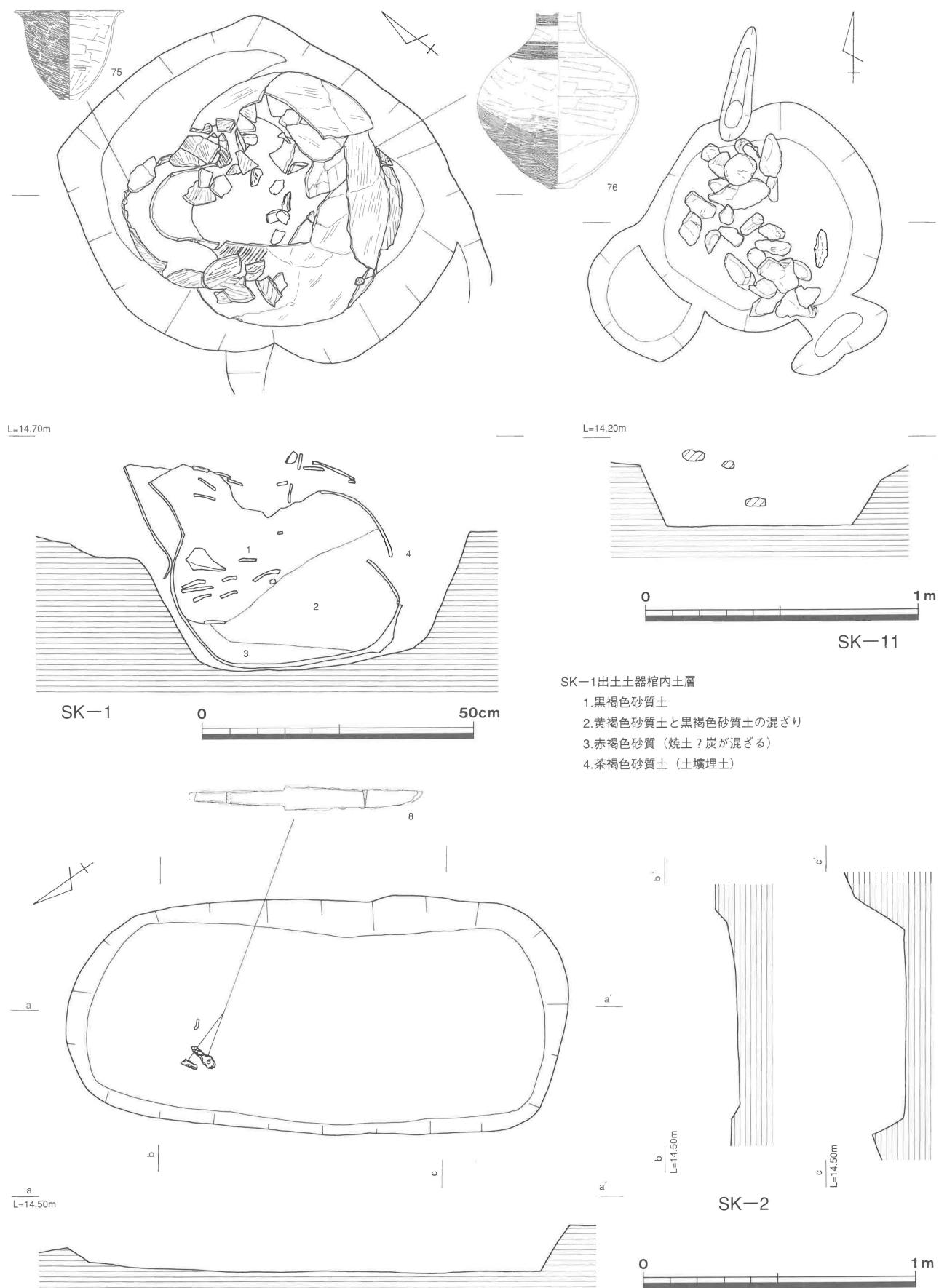
SK-9 (第19図)

F-4区で検出された土壙で、他の土壙と重複している。平面形はほぼ円形で、規模は径40cm、深さは11cmである。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には縄文時代前期中葉と思われる土器があり、時期は前期中葉の北白川下層Ⅱ式のものと思われる。



第20図 遺構実測図 (1 / 80)





第22図 SK-1・2・11遺物等出土状況図 (1/10・1/20)

S K-10 (第19図)

E-4区で検出された土壙で、他の土壙と重複している。平面形はほぼ円形で、規模は径35cm、深さは13cmである。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には古墳時代と思われる土師器・壺の底部破片があり、時期は古墳時代のものと思われる。

S K-11 (第19・22図)

E-5区で検出された土壙で、SD-1や他の土壙と重複している。平面形は円形に近く、規模は径87cm、深さは24cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。土壙内からは10~20cm大の礫が多数出土している。出土遺物は無く、時期は不明である。

S K-12 (第19図)

F-3・4区の古墳東側で確認された埋没谷状の遺構である。遺構は古墳周溝と重複しているが、埋土は黒褐色砂質土で周溝埋土と同じであり、重複部の区別はできなかった。検出長約7m、幅約5m、深さは約0.5m、主軸方向はN-44°-Eで調査区外に延びている。底面は皿状と比較的緩やかである。

出土遺物には須恵器・壺・甕、土師器・壺・高坏があり、また攪乱された上部から天目茶碗と内耳鍋が出土している。

2. 遺物 (第23~26図、第2~4表)

今回の調査で出土した遺物は、古墳に付随する遺物を除くと縄文土器が大半であった。縄文時代の遺物はコンテナ箱(34×54×20cm)に2箱程出土している。以下では、出土遺物を縄文土器・弥生土器、古墳時代以降の土器、石器に分けて説明する。

A. 縄文土器・弥生土器 (第23・24図・第2表)

ここでは縄文土器・弥生土器について、遺構ごとに説明する。なお、細かな調整・法量等は第2表の観察表に記している。

S B-1 (第23図1~5)

1は口縁部破片である。口縁は外傾し、端部は面をなして内面に張り出す。口縁部に3条の隆帯を巡らし、隆帯上はヘラで連続刻目が入れられている。下2条の隆帯間には縄文が施されている。上1条の隆帯からは2対の刻目隆帯が口縁端部にかけて突起状に貼り付けられている。2は口縁部破片で、隆帯が2条貼り付けられ、隆帯上は連続刻目が施されている。端部は面をなしている。3は波状口縁の破片で、端部はナデ曲げられている。斜位に隆帯が貼り付けられている。地文に縄文が用いられている可能性があるが、摩滅して不鮮明である。4・5は体部破片で、羽状縄文が施されている。

S B-2 (第23図 6~11)

6は体部破片で、隆帯の下に羽状縄文が施されている。7は体部破片で、羽状縄文が施されている。8・9は体部破片で、縄文が施されている。10・11はP7出土の土器である。10は口縁部付近の破片で、縄文地に連続刻目が入れられている。11は体部破片で、羽状縄文が施されている。

S B-3 (第23図12~14)

12はやや内湾する口縁部破片で、端部は丸くて内外から連続刻目が入れられている。口縁部には刻目隆帯が2条貼り付けられている。13は口縁部の破片で、端部付近の外面に突起が付けられている。14は体部破片で、半截竹管の押し引きによる連続刺突文が施されている。

S K-1 (第24図75・76)

75・76は土器棺として用いられたものである。75は甕である。口縁は外反し、端部は面をなして4箇所に押圧による窪みが入れられている。体部は砲弾状をなし、底部は平底である。外面にはアナダラ属の二枚貝による条痕文が施されるが、底部付近は半截竹管による条痕になっている。内面は板ナデ調整がされている。外面上半部付近に煤が付着している。76は壺である。口縁部は打ち割られている。頸部は細く肩部で張り出し、体部は大きく膨らんでいる。底部は平底である。櫛状工具によって頸部及び肩部に横線文が巡らされている。体部上半分は板ナデされて無文であるが、体部下半分から底部にかけて貝による条痕文が施されている。内面は板ナデ調整されている。

S K-6 (第23図15・16)

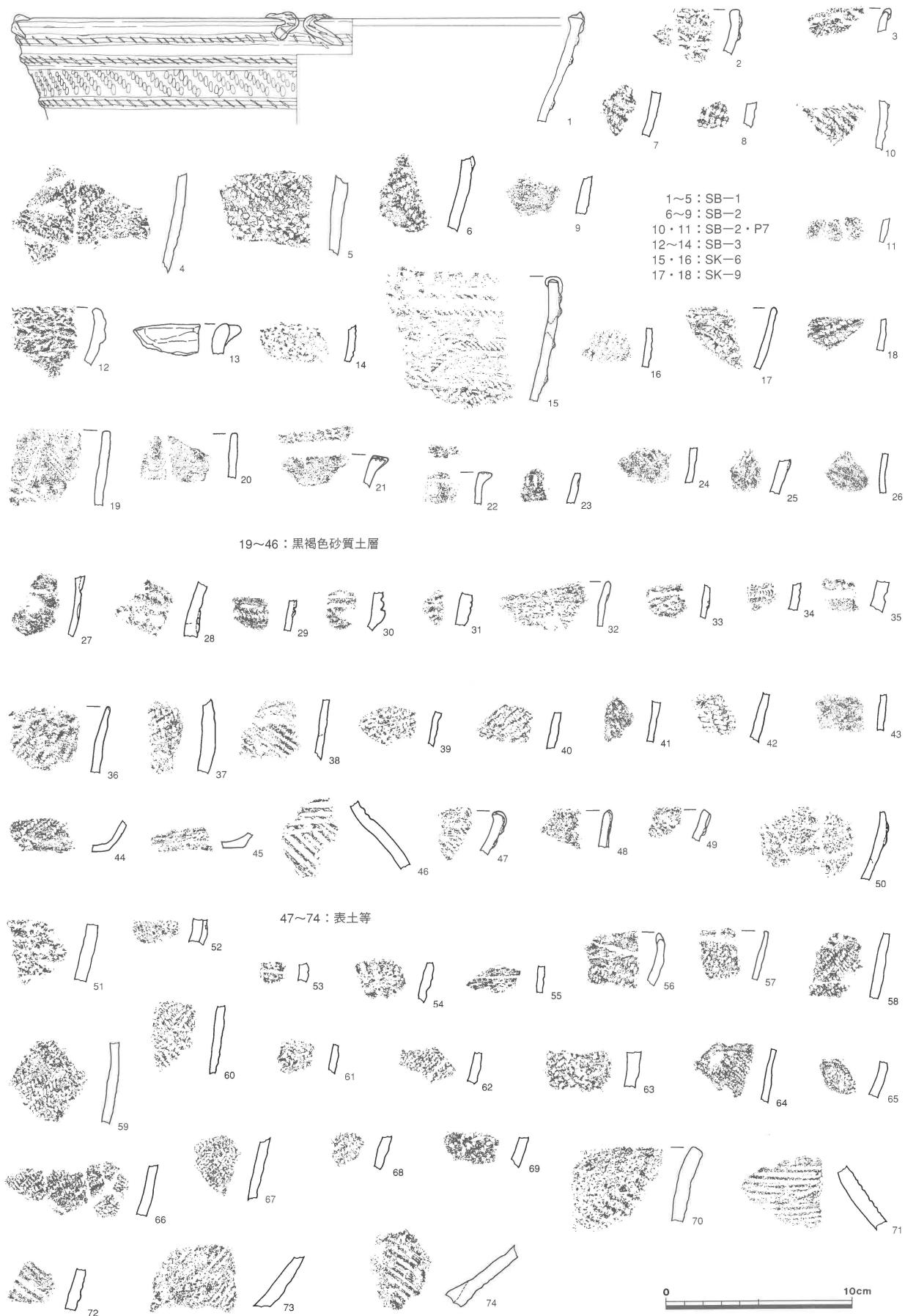
15は口縁部破片である。口縁はやや内湾し、端部は面をなして連続刻目が入れられている。隆帯が突起状に端部に付けられている。口縁部には4条の刻目隆帯を巡らすが、上から3条目の隆帯はY字状に広がり、上下の隆帯に結合している。隆帯下には縄文が施されている。口縁部には補修孔がある。16は体部破片で、縄文が施されている。

S K-9 (第23図17・18)

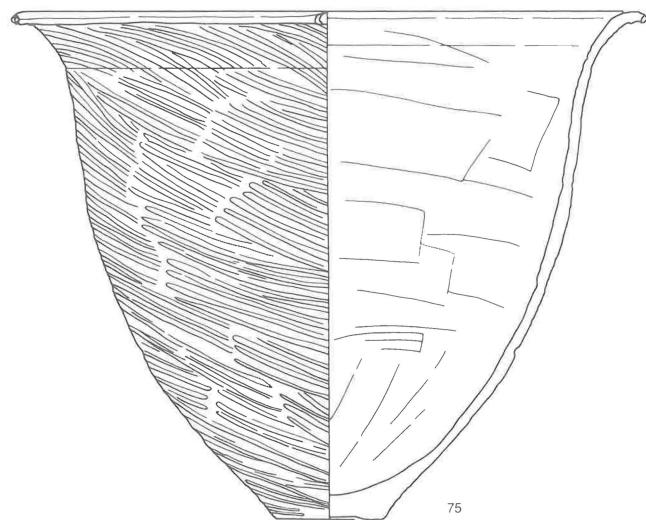
17は口縁部破片で、端部は丸い。外面は縄文が施されている。18は体部破片で、縄文が施されている。

黒褐色砂質土層 (第23図19~46)

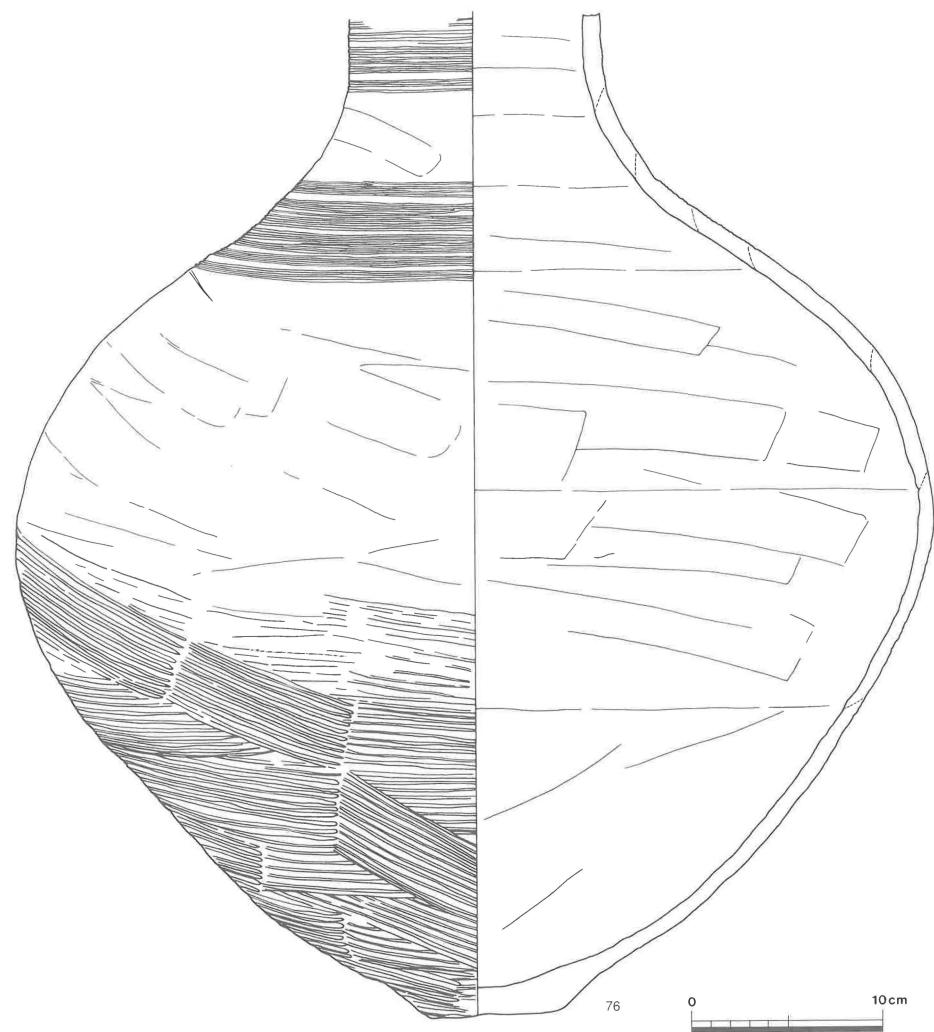
19・20は口縁部破片である。口縁部はほぼ直立し、端部は面をなす。外面には櫛描波状文が施されている。21・22は口縁部破片であり、口唇部は肥厚されて半截竹管によると思われる連続刺突文が入れられている。23・24は口縁部付近の破片であり、刺突文が施されている。25は口縁部付近の破片であり、刻目隆帯が施文されている。26は体部破片であり貝で浅い条痕が施文されている。27は口縁部付近の破片である。隆帯が貼り付けられ、その下に指による押圧痕がみられる。28は体部破片であり、隆帯に連続刺突文が入れられている。隆帯より上は縄文が施されていた可能性がある。29は体部破片



第23図 出土遺物実測図-1 (1/3)



75・76 : SK-1



第24図 出土遺物実測図一2 (1/4)

であり、刺突文、連続爪形文が施されている。30は口縁部付近の破片であり、半截竹管による半隆起線文が施され、その下に刻目が施されている。31は体部破片であり、刻目隆帯下に縄文が施されている。32は口縁部破片である。摩滅して不鮮明であるが、口縁沿いに半截竹管の刺突文が施され、その上には刻目、下には縄文が施されていたようである。33・34は体部破片で、半截竹管の押し引きによる連続爪形文が施されている。35は体部破片であり、沈線文が入れられている。36は口縁部破片であり、口縁端部は尖り、そこに刻目が入れられている。外面には縄文が施されている。37～42は体部破片であり、37・38は羽状縄文、39～42は縄文が施されている。43は体部破片であり沈線文の上に縄文が施されている。44・45は平底の底部破片であり、44は縄文が施されている。46は条痕文土器の壺肩部破片である。櫛状工具で横位及び斜位に条痕文が施されている。

表土等（第23図47～74）

47はやや内湾する口縁部破片で、端部は面をなして内側が肥厚しており、内外から連続刻目が入れられている。口縁部には刻目隆帯が2条貼り付けられている。48・49は口縁部破片で、端部付近に縦位と横位の低い隆帯が貼り付けられ、刻目が入れられている。50はやや内湾する口縁部付近の破片で、刻目隆帯が2条貼り付けられている。51は体部破片で、摩滅で不鮮明であるが押型文が入れられているようである。52は口縁部付近の破片であり、貼り付け隆帯に竹管による刺突文が入れられている。53は体部破片で、半截竹管文が施されている。54は体部破片で、摩滅が著しいが縄文と沈線文が施されているようである。55は体部破片で、1条の沈線文が施されている。56は波状口縁の破片である。口縁はやや内湾し、口縁沿いは撫でられて無文帯をなし、その下に縄文が施されている。57は縄文の施された口縁部破片である。58～69は縄文の施された体部破片であり、59～61・66・67は羽状縄文である。70～74は条痕文土器である。70は甕の口縁部破片で、口縁はやや外反して端部は丸い。外面に条痕？が施されている。71は壺の肩部破片である。半截竹管による条痕文が施されている。72・73は体部破片で、74は底部付近の破片である。半截竹管による条痕文が施されている。

B. 古墳時代以降の土器（第25図、第3表）

古墳時代以降の遺物では須恵器、灰釉陶器、中世陶器、陶器、瓦などがコンテナ箱（34×54×20cm）に2箱程出土している。量的には灰釉陶器が多い。以下、遺構ごとに土器を説明する。なお、遺物についての細かな調整・法量・時期等は第3表の観察表に記している。

SK-2（第25図77）

77は灰釉陶器・碗である。口縁部は端部付近で外反し、端部は丸い。灰釉が掛けられている。調整は内外面回転ナデである。刀子については（第38図8）を参照して頂きたい。

SK-5（第25図78～87）

78は須恵器・高壺と思われるものである。口縁部はほぼ直立し、端部は丸い。調整は内外面回転ナ

デである。79・80・82・83は灰釉陶器・碗である。口縁部は端部付近で外反し、端部は丸い。底部には高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデであり、底部は回転ヘラケズリ（80・83）と糸切り（79）である。81は中世陶器・碗である。口縁部は端部付近で外反し、端部は丸い。底部には高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデであり、底部は糸切りである。84は中世陶器・鉢である。底部破片で、底部には高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデである。85は土師器・甕である。口縁部は外反し、端部は肥厚されて撫で窪んでいる。調整は内外面ナデである。86・87は製塩土器と思われるものである。口縁は真っ直ぐ延び、端部は丸い。調整は内面板ナデ（86）、ナデ（87）で、外面はナデ、指押さえである。

SK-10（第25図88）

88は土師器・壺の底部破片である。底部は平底であるが中央部が若干窪む。調整は内面ナデ、外面板ナデ、指押さえ、底部は未調整である。

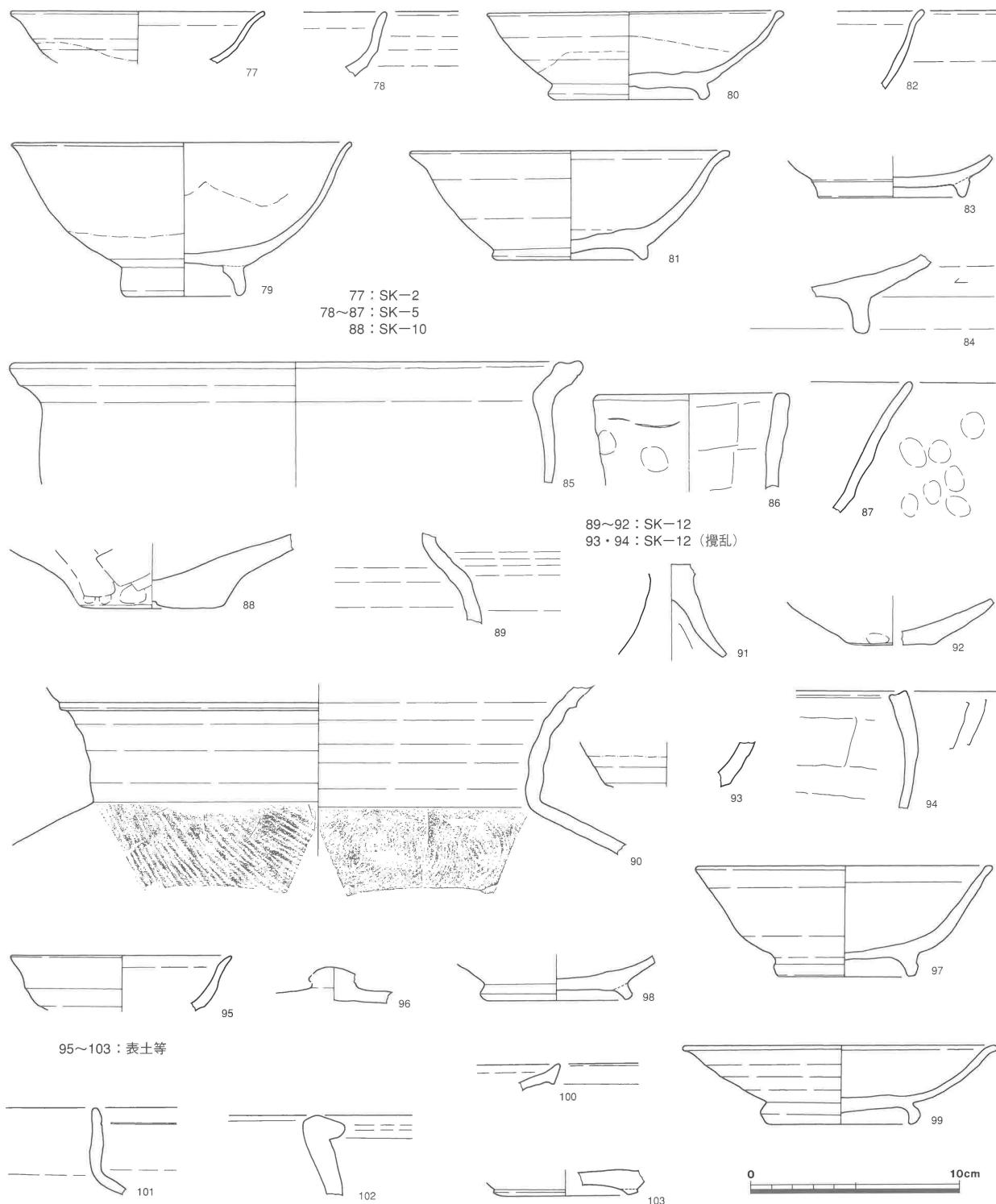
SK-12（第25図89～94）

89は須恵器・壺と思われるものである。肩部から内傾している。調整は内外面回転ナデである。90は須恵器・甕の頸部破片である。口縁部付近に突帯を巡らし、頸部で屈曲している。調整は内面回転ナデ、同心円文、外面は回転ナデ、タタキメである。91は土師器・高壺であり、脚部は緩やかに広がっている。調整は内面シボリ痕、外面は摩滅で不明である。92は土師器・壺の底部破片である。底部は平底である。調整は摩滅のため不明であるが、外面に指押さえ痕が認められる。

93・94は攪乱部出土の土器である。93は陶器・碗である。いわゆる天目茶碗の底部付近の破片である。調整は内面回転ナデ、外面は回転ヘラケズリで、鉄釉がかかる。94は土師器・鍋である。口縁部は内湾し、端部は撫で窪んでいる。調整は内外面板ナデであり、外面に煤が付着している。

表土等（第25図95～103）

95は須恵器・高壺の壺部と思われるものである。口縁部はやや外反して端部は丸い。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリである。96は須恵器・壺蓋の摘部破片である。いわゆる宝珠摘である。調整は内外面回転ナデである。97・98は灰釉陶器・碗である。97は口縁部は真っ直ぐ延び、端部は丸い。底部には高台が貼り付けられている。98は底部破片である。調整は内外面回転ナデであり、底部は糸切りである。99は灰釉陶器・皿である。口縁部は端部付近でやや外反し、端部は丸い。底部には断面三日月形の高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデであり、底部は回転ヘラケズリである。100は灰釉陶器・壺の口縁部破片で、端部は面をなしている。調整は内外面回転ナデである。101は土師器・壺である。口縁部は屈曲して直立しており、端部は丸い。調整は摩滅のため不明である。102は土師器・鍋である。いわゆる清郷型鍋であり、口縁部は短く屈折し、断面形状が三角形の鎧状口縁である。調整は内面摩滅のため不明、外面ナデである。103は中世陶器・碗である。底部破片で、扁平の高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデであり、底部は糸切りである。



第25図 出土遺物実測図-3 (1/3)

C. 石器（第26図・第4表）

石器は石鏃2点、剥片2点、搔器1点、石匙1点、石錘2点、凹石1点が出土している。ここでは種類ごとに述べる。法量等は第4表参照。

石鏃（第26図1・2）

1は基部が抉れる凹基無茎鏃である。平面形は二等辺三角形をなし、調整剥離は表裏に行っている。SB-2から出土している。2は平基有茎鏃である。平面形は五角形をなす、いわゆる五角形鏃である。調整剥離は表裏に行っている。淡茶褐色砂質土層から出土。

剥片（第26図3・4）

3・4は縁辺部の一部に使用痕と思われる微細で不規則な剥離が認められる剥片である。3は墳丘盛土、4は古墳主体部から出土している。

搔器（第26図5）

5は平面形が台形の底辺部に刃部がみられる。調整加工は比較的細かく、底辺部両側から敲打して剥離させている。黒褐色砂質土層から出土。

石匙（第26図6）

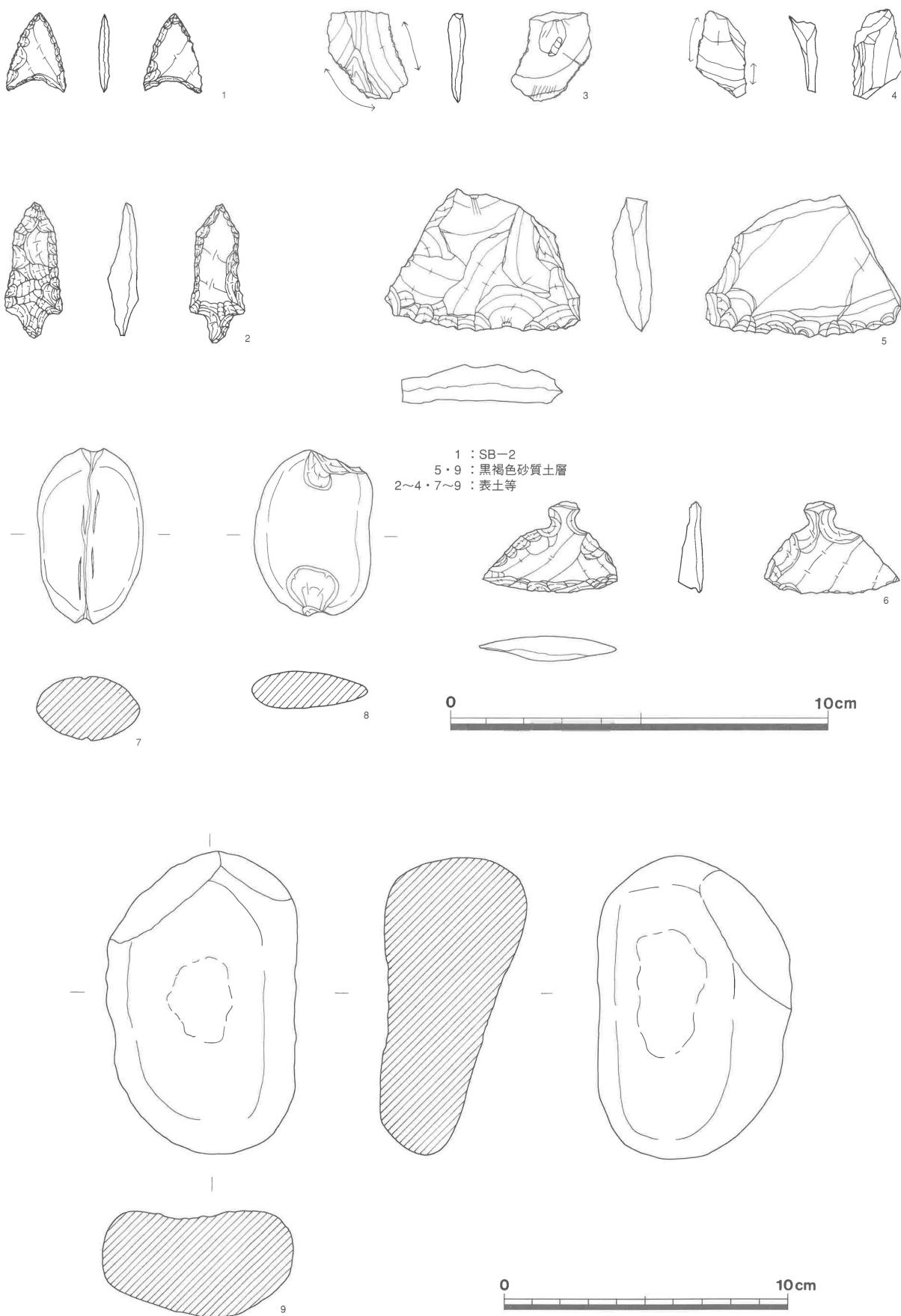
6は摘み状の突起を有する横型石匙である。縁辺部に粗い刃部があり、調整加工は比較的粗くて片側から敲打して剥離させている。攪乱から出土している。

石錘（第26図7・8）

7は有溝石錘で、楕円形の礫の長軸端を擦り切って溝をつけ、縄掛け部を作っている。古墳主体部から出土している。8は打欠石錘で、平面形が楕円形で扁平な礫の長軸両端を打ち欠いて縄掛け部を作っている。古墳主体部から出土している。

凹石（第26図9）

9は凹石と考えたものである。平面形が楕円形をなす比較的扁平な礫を用いて、表裏両面で敲打したため、両面が僅かに窪んでいることから凹石と判断した。黒褐色砂質土層から出土。



第26図 出土遺物実測図-4 (2/3 · 1/2)

第2表 繩文土器・弥生土器観察表

遺物 NO.	遺構	器種・分類	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考	時期
23 - 1	S B - 1	J 深鉢	密	良好	黒褐色	外面刻目隆帶、繩文(RL)、内面ナデ、口径 31.2cm、残存高 5.2cm		北白川下層 II c 式
2	S B - 1	J 深鉢	やや粗	良好	淡茶褐色	外面刻目隆帶、内面摩滅		北白川下層 II c 式
3	S B - 1	J 深鉢	やや粗	良好	淡黄褐色	外面隆帶、繩文？、内面摩滅		北白川下層 II c 式
4	S B - 1	J 深鉢	やや粗	良好	茶褐色	外面羽状繩文 (RL)、内面ナデ		北白川下層 II c 式
5	S B - 1	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面羽状繩文 (RL)、内面ナデ		北白川下層 II c 式
6	S B - 2	J 深鉢	密	良好	淡黄褐色	外面隆帶、羽状繩文 (RL)、内面ナデ		北白川下層 II c 式
7	S B - 2	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面羽状繩文 (RL)、内面ナデ		北白川下層 II c 式
8	S B - 2	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面繩文 (RL)、内面ナデ		北白川下層 II c 式
9	S B - 2	J 深鉢	密	良好	淡灰褐色	外面繩文、内面ナデ		北白川下層 II c 式
10	SB-2・P7	J 深鉢	密	良好	茶色	外面連続刻目、繩文 (RL)、内面ナデ		北白川下層 II c 式
11	SB-2・P7	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面羽状繩文 (RL)、内面ナデ		北白川下層 II c 式
12	S B - 3	J 深鉢	密	良好	暗茶褐色	外面繩文 (RL)、内面板ナデ		北白川下層 II c 式
13	S B - 3	J 深鉢	密	良好	黒褐色	外面突起、内面摩滅		北白川下層 II c 式
14	S B - 3	J 深鉢	密	良好	淡灰褐色	外面連続刺突文、内面ナデ		北白川下層 II c 式
15	S K - 6	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面刻目隆帶、繩文 (LR)、突起、端部連続刻目、内面ナデ、補修孔		北白川下層 II c 式
16	S K - 6	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面繩文 (LR)、内面ナデ		北白川下層 II c 式
17	S K - 9	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面繩文 (RL)、内面ナデ		北白川下層 II 式
18	S K - 9	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面繩文 (RL)、内面ナデ		北白川下層 II 式
19	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡灰褐色	外面櫛描波状文、内面ナデ		天神山式
20	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡灰褐色	外面櫛描波状文、内面ナデ		天神山式
21	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡灰褐色	内外面ナデ、口唇部連続刺突文		天神山式
22	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡灰褐色	内外面ナデ、口唇部連続刺突文		天神山式
23	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡灰褐色	外面連続刺突文、内面摩滅		清水ノ上 II 式
24	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面刺突文、内面ナデ		清水ノ上 II 式
25	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面隆帶、刻目、内面ナデ		北白川下層 II c 式
26	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面貝条痕、内面ナデ		前期中葉
27	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面押圧痕、内面貝条痕？		清水ノ上 II 式
28	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面隆帶、刺突文、繩文、内面ナデ		清水ノ上 II 式？
29	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文、刺突文、内面ナデ		北白川下層 II c 式
30	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半隆起線文、刻目、内面ナデ		山田平式
31	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面刻目隆帶、繩文、内面ナデ		北白川下層 II c 式
32	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	茶色	外面連続刺突文、刻目、繩文？、内面ナデ		北白川下層 II a 式
33	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡茶色	外面連続爪形文、内面ナデ		北白川下層 II b 式
34	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面連続爪形文、内面ナデ		北白川下層 II b 式
35	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面沈線文、内面ナデ		中期？
36	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面繩文 (LR)、刻目、内面ナデ		前期中葉
37	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面羽状繩文 (LR)、内面ナデ		前期中葉
38	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡灰褐色	外面羽状繩文 (LR)、内面ナデ		前期中葉
39	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面羽状繩文、内面ナデ		前期中葉
40	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面繩文 (LR)、内面ナデ		前期
41	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面繩文、内面摩滅		前期
42	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	淡黄褐色	外面繩文 (LR)、内面ナデ		前期
43	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面繩文 (RL)、沈線文、内面ナデ		前期
44	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面繩文 (LR)、内面ナデ、底部未調整		前期
45	黒褐色砂質土層	J 深鉢	密	良好	暗褐色	内外面ナデ、底部未調整		前期
46	黒褐色砂質土層	Y 壺	密	良好	黄褐色	外面半截竹管条痕文、内面ナデ		弥生前～中期
47	試掘跡	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面刻目隆帶、端部連続刻目、内面ナデ		北白川下層 II c 式
48	墳丘内	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面刻目隆帶、内面貝条痕		北白川下層 II c 式
49	試掘跡	J 深鉢	やや粗	良好	淡黄褐色	外面刻目隆帶、内面ナデ		北白川下層 II c 式
50	試掘跡	J 深鉢	やや粗	良好	茶褐色	外面刻目隆帶、内面摩滅		北白川下層 II c 式
51	墳丘内	J 深鉢	やや粗	良好	黒褐色	外面押型文？、内面ナデ		押型文土器？
52	試掘跡	J 深鉢	密	良好	赤褐色	外面隆帶、刺突文、内面ナデ		一乗寺南遺跡下層式
53	試掘跡	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半截竹管文、内面ナデ		北白川下層式？
54	主体部	J 深鉢	やや粗	良好	淡赤褐色	外面繩文？、沈線文？、内面ナデ		前期？
55	墳裾	J 深鉢	密	良好	暗灰褐色	外面沈線文、内面ナデ		前期
56	試掘跡	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面繩文 (RL)、内面ナデ		前期中葉
57	試掘跡	J 深鉢	やや粗	良好	茶褐色	外面繩文 (RL)、内面ナデ		前期中葉
58	試掘跡	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面繩文 (RL)、内面ナデ		前期中葉
59	墳丘内	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面羽状繩文 (LR)、内面ナデ		前期中葉
60	墳丘内	J 深鉢	やや粗	良好	黄褐色	外面羽状繩文 (RL)、内面ナデ		前期中葉
61	墳丘内	J 深鉢	密	良好	暗茶褐色	外面羽状繩文、内面ナデ		前期中葉
62	試掘跡	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面繩文 (RL)、内面ナデ		前期中葉
63	試掘跡	J 深鉢	やや粗	良好	灰褐色	外面繩文 (RL)、内面ナデ		前期中葉

遺物 NO.	遺構	器種・分類	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考	時期
23 - 64	墳丘内	J深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		前期中葉
65	試掘跡	J深鉢	やや粗	良好	淡茶褐色	外面縄文、内面摩滅		前期中葉
66	試掘跡	J深鉢	密	良好	茶褐色	外面羽状縄文 (LR)、内面ナデ		前期中葉
67	試掘跡	J深鉢	密	良好	茶褐色	外面羽状縄文 (RL)、内面ナデ		前期中葉
68	試掘跡	J深鉢	密	良好	茶褐色	外面縄文 (LR)、内面ナデ		前期中葉
69	墳丘内	J深鉢	密	良好	茶褐色	外面縄文、内面ナデ		前期中葉
70	墳丘内	Y甕	やや粗	良好	淡茶褐色	外面条痕文?、内面ナデ		弥生前期・水神平式
71	墳丘内	Y壺	密	良好	淡黄褐色	外面半截竹管条痕文、内面ナデ		弥生前～中期
72	墳丘内	Y甕 or 壺	密	良好	黄褐色	外面貝条痕文、内面ナデ		弥生前～中期
73	古墳主体部	Y甕 or 壺	密	良好	淡黄褐色	外面半截竹管条痕文、内面ナデ		弥生前～中期
74	墳丘内	Y甕 or 壺	密	良好	淡茶褐色	外面貝条痕文、内面ナデ		弥生前～中期
24 - 75	S K - 1	Y甕	やや粗	良好	淡褐色	外面貝条痕文、底部付近半截竹管条痕文、口唇部押圧痕、内面板ナデ、煤付着、口径 32.0cm、器高 26.9cm、底径 5.4cm	弥生中期中葉・岩滑式	
76	S K - 1	Y壺	やや粗	良好	橙褐色	外面頸部・肩部櫛描横線文、体部上半分板ナデ、底部付近貝条痕文、内面板ナデ、残存高 52.8cm、最大径 47.8cm、底部径 6.0cm	弥生中期中葉・岩滑式	

* J - 縄文土器 Y - 弥生土器 法量の単位は cm。

第3表 古墳時代以降遺物観察表

遺物 NO.	遺構	器種・分類	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整	備考	時期
25 - 77	S K - 2	K碗		11.2 (2.6)		密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ、灰釉		11c
78	S K - 5	S高杯				密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ		古墳
79	S K - 5	K碗	16.6	7.6	5.8	密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り痕、灰釉		11c 前
80	S K - 5	K碗	14.8	4.4	7.2	密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、灰釉		11c 前
81	S K - 5	P碗	13.0	5.4	7.2	密	良好	灰色	内外面回転ナデ、底部回転糸切り痕、灰釉		11c 中
82	S K - 5	K碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ		古代
83	S K - 5	K碗		(1.9)	7.0	密	やや不良	灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		11c 前
84	S K - 5	P鉢				密	良好	褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ		11c ~ 12c
85	S K - 5	H甕	27.5	(6.1)		密	良好	橙褐色	内外面ナデ		10c ~ 11c
86	S K - 5	H製塙土器		9.0 (4.6)		密	良好	淡橙褐色	内板ナデ、外面ナデ、指押さえ		古代?
87	S D - 5	H製塙土器				密	良好	橙褐色	内面ナデ、外面ナデ、指押さえ		古代?
88	S K - 10	H壺		(2.9)	5.5	密	良好	暗褐色	内面ナデ、外面板ナデ、指押さえ、底部未調整		古墳?
89	N R - 1	S壺				密	良好	青灰色	内外面回転ナデ		8c?
90	N R - 1	S甕		(8.0)		密	良好	灰色	内面回転ナデ・同心円文、外面回転ナデ・タタキメ		古墳
91	N R - 1	H高杯		(4.5)		密	良好	橙褐色	内面シボリ痕、外面摩滅		5c
92	N R - 1	H壺		(2.1)	3.6	密	良好	橙褐色	内外面摩滅		古墳
93	SK-12攪乱	T碗		(2.2)		密	良好	黒褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、鉄釉		17c ~ 18c
94	SK-12攪乱	H鍋				密	やや不良	褐色	内外面板ナデ、煤付着		近世
95	表土	S高杯	10.8	(2.7)		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリ		6c
96	表土	S坏蓋				密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ		7c ~ 9c
97	表土	K碗	14.0	5.5	6.4	密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り		11c 前
98	表土	K碗		(1.8)	6.8	密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り		11c 前
99	表土	K皿	15.0	3.9	6.8	密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		10c 前
100	表土	K壺				密	良好	灰色	内外面回転ナデ		古代
101	表土	H壺				密	やや不良	淡橙褐色	内外面摩滅		4c ~ 6c
102	表土	H鍋				やや粗	良好	暗褐色	内面摩滅、外面ナデ		10c 中
103	表土	P碗		(0.7)	6.2	密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り		14c 前

* S - 須恵器 K - 灰釉陶器 P - 灰釉系陶器 T - 陶器 H - 土師器

法量の単位は cm、() は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。

第4表 石器観察表

遺物 NO.	遺構等	器種・分類	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	石材	備考	時期
26 - 1	S B - 2	R石鎌	2.1	1.6	0.2	0.7	安山岩		北白川下層 II c 式
2	墳丘内淡茶褐色砂質土層	R石鎌	3.7	1.5	0.9	2.9	頁岩?		弥生前～中期?
3	墳丘内	R剥片	2.4	2.1	0.5	2.1	チャート	使用痕有り	前期?
4	古墳主体部	R剥片	1.9	1.3	0.6	1.5	チャート	使用痕あり	前期?
5	黒褐色砂質土層	R撞器	3.8	(5.2)	0.9	21.6	チャート		前期?
6	攪乱	R石匙	2.5	3.6	0.6	4.4	チャート		前期?
7	古墳主体部	R石錐	4.7	2.7	1.7	33.7	塩基性岩		前期?
8	古墳主体部	R石錐	4.5	3.0	1.0	18.8	砂岩		前期?
9	黒褐色砂質土層	R凹石	10.9	6.7	3.8	452	砂岩		前期?

* R - 石器 法量の単位は cm、() は残存数値。

3. まとめ

A. 繩文時代

西側北遺跡では、古墳盛土下から縄文時代の竪穴住居が3軒と土壙、弥生時代の土器棺墓が検出され、古墳周辺からは古代の土壙墓の可能性がある土壙や近世の土壙等が検出されている。ここでは時代ごとに成果をまとめ、遺跡の性格を考えたい。

まず縄文時代のものでは、竪穴住居3軒と土壙が検出されている。竪穴住居は全て北白川下層Ⅱc式期のものであった。土器型式では同型式の竪穴住居であるが、SB-1とSB-2は若干重複していることから時期差は存在している。但し、各竪穴住居の先後関係はわかっていない。竪穴住居の平面形は隅丸方形（SB-1）と円形（SB-2・3）の2タイプが認められている。炉はSB-2のみ確認でき、礫の敷かれた敷石炉であった。愛知県内の竪穴住居例を参考にすると、前期中葉の北白川下層式の住居は設楽町鞍舟遺跡、豊田市馬場遺跡がある。鞍舟遺跡は北白川下層式期の住居が6軒あり、平面形は隅丸方形が2軒、円形が4軒確認されている。このうち3号住居は隅丸方形で、8本の柱穴が環状に巡っている。馬場遺跡は北白川下層Ⅱ式期の住居が2軒あり、平面形が円形で10本の柱穴が環状に巡るものと、平面形が円形で6本の柱穴が環状に巡り、壁面に垂木跡が巡っているものがある。県内の事例が示すように、北白川下層式期には平面形が方形のものと円形のものの2タイプが混在していたようである。今回検出した円形のものは、いずれも南側の柱穴が張り出しており、平面形が五角形または六角形である可能性も考えられた。いずれも全体が確認できていないため断定はできないが、平面形が多角形をなす可能性もあろう。また、炉はSB-2で敷石炉が検出できた。当該期での敷石炉は県内では初検出であり、今後の類例を待ちたい。

調査区からは主に縄文時代早期後葉の天神山式～前期中葉の北白川下層Ⅱc式の土器が出土し、北白川下層Ⅱc式が主体を占める。そして1点のみであるが、早期前葉の押型文土器と思われる破片や中期中葉の山田平式土器が出土している。遺跡全体でみれば、早期後葉～前期中葉の集落遺跡であるものと思われる。また、調査区内から出土した黒曜石について興味深い結果を得ることができた。これら黒曜石は殆どが前期中葉のものと推測されるが、池谷信之氏の分析によると、7点と少なくないものの神津島恩馳産の黒曜石が57.1%も占めていたのである（第6章2参照）。池谷信之氏によると前期の黒曜石は中部高地産のものが流入するようであるが、神津島産のものが主体を占めているのは珍しい。前期においても海岸沿いに黒曜石が流通していたのであろう。

これまでの区画整理事業に伴う牛川西部地区の発掘調査では縄文時代の遺跡が他にも発見されている。多少時期的に重なるが巨視的にみると、眼鏡下池北遺跡（早期前葉）→西側北遺跡（早期後葉～前期中葉）→洗島遺跡（前期前葉～中期中葉）と同じ段丘上を小規模な集落が変遷している可能性がある。

B. 弥生時代

次に弥生時代の土器棺墓についてみよう。墳丘下で確認されたSK-1は、土器棺を据えるために掘られた土壙である。この土壙内からは、弥生時代中期前葉の岩滑式期の壺に甕をかぶせた土器棺が出土している。壺は当初から口縁部・頸部の一部を打ち欠いており、土器棺の主軸方位はN-40°-W、床から40°程に傾けて据えている。更に古墳築造時の整地により標高14.65mの高さで水平に割られたと考えられ、破片が土器棺内や周辺に散乱した状態で検出されたのである。注目されるのは、壺内の堆積物である赤褐色砂質土からリン等及び水銀朱が検出されたことである（第6章3参照）。リン等が検出されたことから骨が入れられていたことがわかったが、水銀朱が検出されたことからこの骨は動物骨ではなく人骨の可能性が考えられる。一般的に土器棺は再葬骨が埋葬されるといわれ、打ち割られた壺の開口部は23×18cmと小さくて死体をそのまま入れることは困難であることから、再葬された骨が壺の中に納められたものと考える。縄文時代の土壙墓や弥生時代の九州の甕棺墓には、土壙床面や甕棺内面が水銀朱で塗られる例があるが、SK-1出土の壺棺内面には水銀朱は塗られていない。このことから水銀朱は骨そのものに塗られるか掛けられ、骨と一緒に腐食してきたものが赤褐色砂質土であると思われる。管見では水銀朱が骨に付けられた土器棺の類例を知らない。段丘高台の先端という好立地において1基のみ検出されたという希少性、水銀朱が骨に付けられていたという特殊性から、SK-1出土の土器棺は、何らかの特別な人物の墓であった可能性が高い。

土器棺は、土器の文様等の特徴から弥生時代中期前葉の西三河を中心で分布する岩滑式（新段階）と考えられ、在地に分布する続水神平式のものではなかった。今回、国立歴史民俗博物館で甕外面胴部上半に付着した炭化物を炭素14年代で測定して頂いている（藤尾2008）。その結果、炭素14年代では 2255 ± 20 BP、較正年代で390-350cal BC（確率41.7%）、295-225cal BC（確率50.6%）、220-210cal BC（確率3.27%）という測定値であった。測定試料のδ13 (IRMS) は-26.0‰であり、海洋リザーバー効果の影響は無いものと考えられるものであった。今回の年代測定によって弥生中期前葉の実年代を得ることができ、この地域の弥生時代の年代を考える上で重要といえる。

C. 古代以降

最後に古代以降の遺構をみよう。古代のものではSK-2・5がある。SK-2は11世紀のものと思われ、平面形は隅丸長方形で規模は長辺1.8m、短辺0.9mの土壙である。土壙北側より刀子（第38図8）が出土している。SK-2は規模や形状から土壙墓で、刀子は副葬品であった可能性が考えられる。SK-5は11世紀中葉と思われるほぼ方形の土壙である。規模は長辺1.5m、短辺1.4mであり、須恵器・壺、灰釉陶器・碗、中世陶器・碗・鉢、土師器・甕、製塩土器がまとまって出土している。廃棄土壙と思われたが、方形という形態と土器がまとまって出土していることから、方形タイプの土壙墓の可能性もある。

近世～近代と思われる遺構にはSK-3の方形土壙、SK-4の円形土壙がある。これらは規模が1m前後で、深さも1m程というように比較的大型で、古墳の墳丘斜面を利用して掘られている。同

じ段丘上の西側遺跡からは地下式坑が多数検出されているが、それらと比較すると規模は小さい。貯蔵穴であったと考えるのが妥当であろう。

D. まとめ

以上まとめると、西側北遺跡は縄文時代の早期末葉から集落が営まれ、前期中葉が主体であったようである。縄文時代の集落は小規模なものと考えられ、同じ段丘上にある他の縄文遺跡と大差はない。弥生時代以降は墓域という位置づけになり、古代まで墓が造られていた。同じ段丘上にある西側遺跡は弥生時代～近世の規模が大きな集落であるが、西側北遺跡は西側遺跡の北東方向にあたり、段丘北端にあるため西側遺跡の墓域とされた可能性が高い。また、西側北遺跡に隣接して中世以降の西側古墓群がある。両遺跡を一体的に捉えると、弥生時代から近世に至るまで西側北遺跡・西側古墓群は西側遺跡の墓域とされ続けていたものと推測できるのである。

参考文献

藤尾慎一郎 2008 「弥生時代の年代研究 2006～2007年度の報告」『学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」平成19年度研究報告会資料集』17～24頁 学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」事務局：佐倉